

令和4年度

研修集録



秋田県立横手高等学校

「知」の拠点そして「知」の教授者

校長 難波 文彦

年明け、ある会議に出席した際、休憩時間に隣の座席の京極雅幸先生（元秋田明德館高校校長、元あきた文学資料館副館長）と色々お話しさせていただいた。その中で、本校旧図書館の書庫に明治から大正そして昭和前半にかけての数千冊に及ぶ書籍が保管されていたことをご紹介するとともに、和綴じ本も含め大変貴重な書籍があったことや、現在であれば大学生や研究者が読むようなレベルの専門書や専門資料も多く残されていたこととお話した。京極先生はその話を興味をもって聞いてくださり、そのうえで、次のようにおっしゃった。

「当時は、近くに高等教育機関もないし、知識や情報も容易に手に入らない。そのような状況において、地元の人たちにとっては、旧制横手中学校（現横手高校）はこの地域における最高学府であり最高の「知」の拠点であり、その教師はこの地域において最も高い「知」を身につけた知識人として認識され、「知」を教授する存在でもあったと思う。」

おおよそ以上のような内容のお話をうかがい、とても衝撃を受けた。なぜならば、そもそも自分には、そのような視点はなかったからである。

書庫内の書籍を整理していて、さまざまな学問分野の書籍の存在を確認するたびに、こんな専門書まで蔵書として揃えていたのか、これはとても高校生レベルではなく研究者が読むレベルの専門書だ、などと驚き感動するとともに、この事実を生徒や同窓生にも伝えたい気持ちで一杯だった。このような数多くの専門書を本校が所蔵していた事実にはばかり目がいき、所蔵していた事実から読み取れる意義や当時の学校の役割までは目を向けることができなかった。

昨年度、この研修集録の巻頭言で、「「灯台下暗し」「岡目八目」ではないけれど」と題して、授業において授業者には自分では気がつかないことや見えないものがある、周りの目で見えて教えてもらうことが大事である、と書いたが、図らずも今回、自分自身がそのことを実感した。自分では気づかない視点やものの見方を他者から気づかされることはよくあるものである。

今回、京極先生の貴重なご指摘により、本校旧図書館書庫になぜこれだけの専門書が収蔵されていたのか、その理由や背景を理解することができ、納得できた。

一般の人たちが、なかなか専門書を手にするのができなかった時代において、旧制横手中学校は「知」を収集・保管する機能を有しており、ゆえに多くの専門書を所蔵していたのであろう。そして同校の教師たちは、地域からの求めに応じて「知」を伝えたり「知」にもとづいて指導助言をしたりする役割を担っていたのであろう。教師たちは、自分たちのその立場や使命を自覚し、地域の要請に応えるべく「知」を学び身につける努力をしていたであろう。教師は「知」の研究者でもあったと思う。

時は流れ、学校を取りまく状況も学校に求められる役割も大きく変化した。高校教員が身につけなければならない知識も変わり、新たに求められる指導力やスキルも増えている。

しかし、たとえ遠い過去の一時期だったとしても、確かに、学校は地域にとって「知」の拠点でもあり、教師は「知」の研究者・教授者でもあった、ということを知ることができた。

このことに気づいたことで、あらためて、我々教員は学び続けなければならない、我々は「学び続ける教師」でありたい、という思いが強くなった。

目 次

< 巻 頭 言 >

校 長 難 波 文 彦

頁

< 校内相互授業参観 >

研 修 部

1

< 指導主事訪問 >

義務教育課学力向上推進班による訪問

数 学 科 (前期)	堀 川 貴 絵	11
数 学 科 (後期)	木 元 大 輔	17

< 公開研究授業 >

22

(1) 国 語 科	古 谷 祥 多	24
(2) 理 科	小 西 弘 麿	32
(3) 英 語 科	深 沢 隆 彦	36

< 研修報告 >

年次研修

実践的指導力向上研修講座受講報告	古 谷 祥 多 (国語科)	39
教職 5 年目研修講座受講報告	成 田 陽 香 (国語科)	43

総合教育センターB講座

高等学校保健体育授業の充実	山信田 善 宣 (保健体育科)	51
---------------------	-----------------	----

校内研修会

特別支援に関する研修会	研 修 部	53
I C T 講習会	研 修 部	54

令和4年度 校内相互授業参観

研 修 部

- 1 目 的
- ・授業を参観することで、生徒の学習意欲を高める授業づくりを目指す。
 - ・教科を越えて意見を交換し合うことにより、さまざまな視点から目標や課題を見いだす。
 - ・実施期間を設けず、通年で多くの授業を参観し、様々な授業の手法を学ぶ。
 - ・授業参観を通して ICT を効果的に活用する授業作りについて学ぶ。
 - ・生徒が「MDS 基礎」を通して形成される資質・能力をより高めることができる教育活動を推進する。

2 参観方法

〔1〕参観と「参観カード」への入力または Google フォームへの入力

授 業 者	参 観 者																							
①授業実施。 ②提出された「参観カード」を読み、自分の授業を振り返るきっかけにする。	①授業参観。 ②授業後、「参観カード」に感想を記入し、授業者と研修部に1部ずつ提出、または Google フォームへ入力する。授業者への助言や、参考にするべき「おすすめポイント」を記入する。																							
令和4年度 校内相互授業参観 授 業 参 観 カ ー ド <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td>授 業 者</td><td>先生</td><td>科目名</td><td></td></tr> <tr> <td>ク ラ ス</td><td>H R</td><td>参観日</td><td>月 日 () 校時</td></tr> <tr> <td>参観者名</td><td colspan="3">参観できた時間 (導入 途中 後半) 約 分間</td></tr> <tr> <td rowspan="2"> 評価の観点 (複数可) </td><td> ☐ 1 学習課題の提示・確認 ☐ 2 思考判断 ☐ 3 言語活動 ☐ 4 板書の工夫 ICTの使用 ☐ 5 その他 </td><td colspan="2"></td></tr> <tr> <td> MDS基礎で育成される能力との関連 (該当するものいくつかでも) </td><td> ☐ 科学的視点 ☐ ICT技術活用 ☐ 地域の課題との関連 ☐ 他者との協働 </td><td> ☐ 論理的思考力 ☐ データの収集・分析 ☐ 課題発見力 ☐ 表現力の向上 </td></tr> <tr> <td colspan="2">おすすめポイント</td><td colspan="2"></td></tr> </table>		授 業 者	先生	科目名		ク ラ ス	H R	参観日	月 日 () 校時	参観者名	参観できた時間 (導入 途中 後半) 約 分間			評価の観点 (複数可)	☐ 1 学習課題の提示・確認 ☐ 2 思考判断 ☐ 3 言語活動 ☐ 4 板書の工夫 ICTの使用 ☐ 5 その他			MDS基礎で育成される能力との関連 (該当するものいくつかでも)	☐ 科学的視点 ☐ ICT技術活用 ☐ 地域の課題との関連 ☐ 他者との協働	☐ 論理的思考力 ☐ データの収集・分析 ☐ 課題発見力 ☐ 表現力の向上	おすすめポイント			
授 業 者	先生	科目名																						
ク ラ ス	H R	参観日	月 日 () 校時																					
参観者名	参観できた時間 (導入 途中 後半) 約 分間																							
評価の観点 (複数可)	☐ 1 学習課題の提示・確認 ☐ 2 思考判断 ☐ 3 言語活動 ☐ 4 板書の工夫 ICTの使用 ☐ 5 その他																							
	MDS基礎で育成される能力との関連 (該当するものいくつかでも)	☐ 科学的視点 ☐ ICT技術活用 ☐ 地域の課題との関連 ☐ 他者との協働	☐ 論理的思考力 ☐ データの収集・分析 ☐ 課題発見力 ☐ 表現力の向上																					
おすすめポイント																								
※全項目を書く必要はありません。参観した部分でお気付きの点のみご記入ください。 参観カードは授業者の先生と、研修部 (入力または提出用箱) にご提出お願いします。																								

※他教科の授業も含め、積極的に参観する。

※授業全体を通して参観することが望ましいが、部分参観も可とする。

〔2〕「参観カード」の集計結果

研修部が集計し、年度末に研修集録に掲載する。

3 実施状況

過年度比較

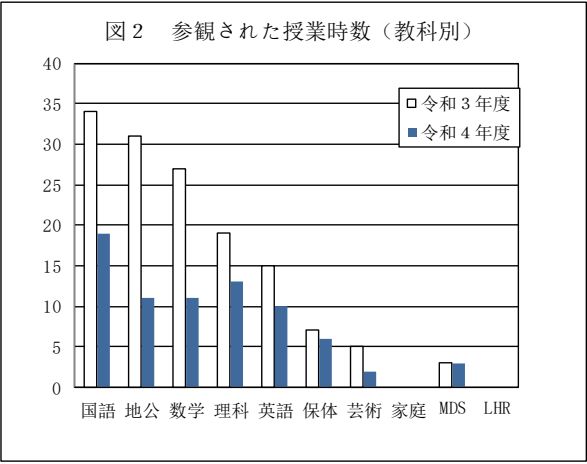
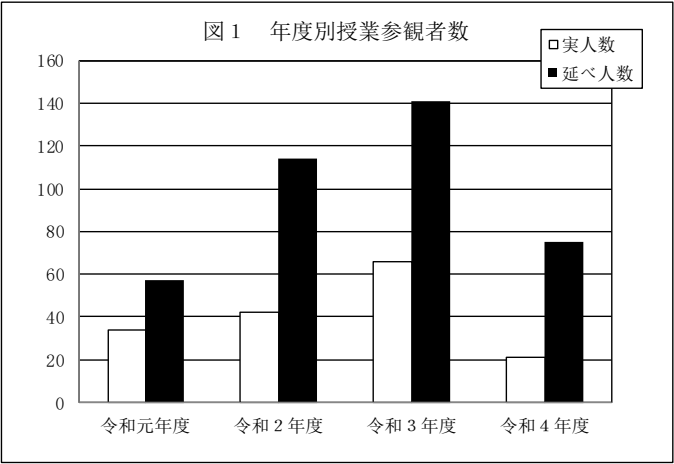
令和4年度 校内相互授業参観 実施状況

研 修 部

実施期間 通年

	授業を参観した人数		参観された授業総時数	参観された授業時数（教科別）									
	実人数	延べ人数		国語	地公	数学	理科	英語	保体	芸術	家庭	MDS	LHR
平成30年度	12	18	18	6	4	1	4	2	0	0	0	1	0
令和元年度	34	57	57	8	15	6	9	8	4	7	0	0	0
令和2年度	42	114	114	9	43	7	17	16	6	9	2	4	1
令和3年度	66	141	141	34	31	27	19	15	7	5	0	3	0
令和4年度	21	75	75	19	11	11	13	10	6	2	0	3	0

※数値はすべて研修部に提出されたアンケート用紙を基に算出していますので、実際の実施状況とは異なる部分があると思われます。



校内相互授業参観 授業参観カードのまとめ

MDS 基礎で育成される能力との関連に関する項目

- ①科学的視点 ②論理的思考力 ③ICT 技術活用 ④データの収集・分析
⑤地域の課題との関連 ⑥課題発見力 ⑦他者との協働 ⑧表現力の向上

1	コミュニケーション英語Ⅱ	2022/4/12	語彙力の強化に焦点を当てた授業だった。生徒は単語を覚えるのに苦労しているが、知らない単語の意味を類推できる思考力がつくよう、接頭語、接尾語等を説明したり、単語の成り立ちに関心を向けさせたりしていた。	3	本時はアナログの利点を生かした授業だったが、ICTを使って音楽や動画などを活用して、英語の学習意欲が高まる工夫を日頃から実践している。
2	数学Ⅰ	2022/6/23	Chromebook、ホワイトボードをタイミングよく有効に使っていた。教師が説明する場面と生徒に考えさせたり説明させたりする場面の配分がよかった。	2,7,8	効果的なグループ学習のやり方、ICTを使うタイミング
3	英語コミュニケーションⅠ	2022/8/26	ALTがICTを活用して自己紹介、JTEが生徒の理解を確認しながら簡単な英語で説明し、思考を促していた。生徒は英語で積極的に質問していた。		MDSとの関連ではないが、授業後にJTEが本時の授業で見えてきた課題を基に、ALTに助言したり、次回に向けた改善点を話し合い、さっそく授業計画を修正していた様子を見て、授業改善に日々努めていることがわかった。
4	日本史B	2022/9/7	「密教芸術に関する好きな仏像を選んでなぜ好きなのか説明してください。」という取り組みがよかった。	7,8	平易な言葉を用い、生徒に答えさせたり自分の考えを発言させる場面がみられた。
5	生物	2022/9/30	外部機関と連携しての実験。オンライン上で業者とやり取りをしながらPCR検査をしていくという内容だった。恐縮ながら実験に参加させていただいたところ、このような本格的な実験が授業で可能だということにとっても驚いた。これも業者とのやりとりやICTの用意等事前の念入りな準備があったからこそできたのだと感じる。よりよい授業を行うことについて、授業者自身の教材研究以外の方法を知り、もっと自分の視野を広げていきたいと強く感じた。	1,7	授業でここまで本格的な実験ができる。教材研究の新たな形。
6	保健	2022/10/3	姉を説得するという具体的な状況を設定することで、コミュニケーションには、正しさだけでなく相手への共感や自分の意見を持つことが重要であることが生徒に伝わっていた。	1,4,8	生徒がなりきっている！
7	保健	2022/10/3	・「LINEの文面で喫煙の危険性を伝える」という設定により、表現を吟味している様子がうかがえました。親など、実際に身近に喫煙者がいた場合に生徒はどのようなことを考えるのか気になりました。 ・「出典をはっきり」という声かけの効果で、出典を含めて発表している生徒もいました。	2,3,4,7,8	道徳教育「相手の立場、個性の尊重」というと生徒同士のやりとりを考えていましたが、架空の相手を設定するというのも面白いと思いました。喫煙をやめさせたいというLINEを送る際、「相手が機嫌が良いとは限らない」「悪いと知っていてもやめられない。ストレスかもね」という言葉がけに、普段のSNSでの振る舞いについて考えた生徒も多かったと思います。
8	保健	2022/10/03	・課題の設定がリアル（後半の説得する文の作成が面白い） ・作業の入る前の指示がわかりやすい ・グループ内での分担領域が明確なので生徒が迷わない ・自分が分担した内容をグループ内で共有させる（相手に伝える）→伝わる表現工夫がある ・バフボが見やすい ・クロムブックを使って調べ学習	3,7,8	道徳教育の特に№9,19について学習が深められていた。生徒が意欲的に授業に参加していた。タバコが体に悪いことを承知している姉への気づかいが道徳だ。
9	生物基礎	2022/10/04	・脳死は人の死か？生物学的に一、道徳的に一 生徒の意見を聞いてみたかった ・実験結果を予想する話し合い活動がとり入れられ、授業が活性化した ・プロジェクトを活用して視覚的にわかりやすい授業で生徒も落ち着いて学習できていた		生徒との会話のやりとりが軽快でテンポのよい授業でした
10	生物基礎	2022/10/04	ICT（板書）の工夫・見習いたい（けど多分私にはできない） 学習内容が興味深く面白い！	2	先生と生徒の掛け合い

校内相互授業参観 授業参観カードのまとめ

MDS 基礎で育成される能力との関連に関する項目

- ①科学的視点 ②論理的思考力 ③ICT 技術活用 ④データの収集・分析
⑤地域の課題との関連 ⑥課題発見力 ⑦他者との協働 ⑧表現力の向上

11	MDS基礎	2022/10/05	・発表者とそれを評価する側が常に活動していた ・時間にまったくムダがない ・一人一人が発表する時間をとらなくても、その意見を皆で共有できる！		いきいきしている生徒の様子
12	MDS基礎	2022/10/05	・プレゼン発表と質疑応答により、生徒の主体的協働的な学びが展開されていた。 ・アンケート作成の過程で多様な視点の獲得が可能になっている。 ・グーグルフォームを使用して発表の評価やよりよいアンケート作りのアドバイス等がタイムリーに行われておりICTが効果的に活用されていた。	3,5,6,7	データサイエンスの基礎を学ぶことを通して、地域の課題を発見し、解決を目指す、まさに「社会に開かれた教育課程」を具現化する先進的な授業です!!
13	現代文B	2022/10/14	・生徒が安心して自分の意見を述べている。 ・教員との信頼関係がうかがえる ・教員と生徒の対話を通してクラス全体で考えが深まっていると感じた。		教員と生徒の対話を通した深い学び
14	現代文B	2022/10/14	一つの発問についてゆっくりじっくり生徒に問いかけ問いかけなおしたりゆさぶったりしながら一人一人の思考を丁寧に練っていたように思います		ドラゴンボール、ワンピース等ぜひヴェニスの人々のDVDを流しながらやっていただきたい内容でした。
15	体育	2022/10/19	・授業記録ノートが有効に活用されている。 ・学習の狙いや評価の観点が一覧に示されていてわかりやすい。 ・クロムブックがうまく活用されており、動画を確認しながらくり返し練習できていた。 ・固め技の連続を身に付ける過程でお互いに話し合い、教え合う場面が見られ、主体的で対話的な学びになっていた。		考える柔道
16	体育	2022/10/19	学習ノートにまとめているのが、自分の体育の授業のイメージと異なって斬新でした。	3,6,7	生徒が二人でクロムブック固め技を確認している様子
17	数学B	2022/10/20	・先生にわかりやすい、ていねいな説明 ・問題を解くときのポイントやコツにも触れており、生徒にとってより実践的な解説になっていた。		
18	古典B	2022/10/24	隣の生徒と確認し合うことで集中力を失わずに取り組めていた...マネしたいと思いました。		過去問を使って「学び」を深めているところ（過去問解説で終わっていない）
19	古典B	2022/10/24	・教師の問いに対して生徒が相互に確認する時間をこまめに取り入れることで集中して主体的に参加できていた。 ・本文理解のポイントを的確におさえた指導で選択肢の吟味もよく行われており、共通テスト対策として生徒の成績アップにつながる実践的な授業だった。		教師の問いかけに生徒が即応答し、授業のリズム、テンポがよく展開されていた。
20	古典B	2022/10/24	センター過去問漢文による問題演習であった。一般的に語や句形の確認に終始しがちな共通テスト対策をそれに留まることなく、親に対する「孝」という道徳の基盤について考えさせた所が特に参考になった。 生徒たちも積極的に発言し、またペアワークに取り組んでいてとてもいい雰囲気での授業だった。ありがとうございました。	2,6,7,8	川越先生の温かい言葉・語り口

校内相互授業参観 授業参観カードのまとめ

MDS 基礎で育成される能力との関連に関する項目

- ①科学的視点 ②論理的思考力 ③ICT 技術活用 ④データの収集・分析
⑤地域の課題との関連 ⑥課題発見力 ⑦他者との協働 ⑧表現力の向上

21	古典 B	2022/10/24	自分の誕生日と昔の誕生日の違いについて比べながら漢文を読み進めていた。選択肢がなぜ正解または不正解なのかの解説がわかりやすかった。生徒たちはペアで積極的に答えを確認していたよかったと思う。	2,7	
22	SS英コミ	2022/10/28	・授業の流れについて説明がありメリハリが効いた授業展開になっていた。 ・個人思考→ペアワーク→全体発表のプロセスがきちんと成立していた。生徒も意欲的で、よく活動していた。 ・Ben先生も授業や生徒に慣れてきたように見えました。		現代的テーマについてよく思考し、表現する授業
23	古典	2022/11/1	「○○できる」といった目標提示だと堅苦しく、かつ授業の概要を掴みにくいと常々感じていたが、宮原先生のような「今日やる内容は○○、△△、□□」と箇条書きにして提示する方法だと授業の流れのイメージを持つことができそうだった。頻繁にペアワークを行ってその都度復習をしながら進めていく濃密な55分だった。また、掲示物を使った板書（文法）とICT（単語や関連語句、物語背景）を同時に効果的に活用していた。これが情報量の多さの秘訣だと感じた。このようにして知識が蓄積されていくことで生徒が自分で考え判断するための武器も増えるだろう。私もこのくらい情報を与えられる授業ができるようになりたい。	2	情報量の多い能動的55分間
24	古典	2022/11/1	・古文単語、助動詞、敬意の方向等おさえながら一文一文の現代語訳がていねい。 ・振り返りシートが小テスト形式→今日の学習内容の定着度を自己診断できる。生徒にとってはありがたいと思う。 ・ICTをうまく活用して学習のポイントや内容理解、背景がわかりやすく説明されていた。 ・ランキングの発表形式をとり入れるなど、生徒の興味関心を引きつける工夫がほどこされ、生徒も楽しみながら授業を受けていた。		生徒にとってわかりやすい、ためになる授業です。
25	古典	2022/11/1	・板書が見やすく、プロジェクターが上手に活用されていた。 ・生徒たちもしっかり考えて、ペアワークを行っていた。	3,7,8	板書が見やすい。
26	現代の国語	2022/11/2	・身近な視点から本文との関連性のある題材による導入。あえて、完結しないことで、学習への意欲喚起にもつながっている。 ・導入の課題が工夫されており、生徒が取り組みやすい。 ・展示の話は貴重な内容だったので、余談だったのがもったいない。展開の中に盛り込んでもよかったかと。 ・「身に見えない人が見えている世界観」という道徳的視点もあり興味深く参観できました。	2,6,7,8	・丁寧な言葉使いによる解説 ・古谷先生の引き出し
27	数学Ⅱ	2022/11/2	定積分を用いた面積計算の工夫に焦点を当てた内容だった。いわゆる1/6公式を使ってもよい条件やよさを伝えながら問題演習を通して実感させていく。やはり便利だよというだけではだめで、不便に感じて実際に使ってみてよさを初めて知って初めて使う気持ちになれると感じた。まさに「やってみせ、言って聞かせて、させてみて・・・」である。私自身も便利な公式や解法をできるだけ伝えたいと思う人間であるが、実際に使わせる機会を設けてこなかったなと反省した。	2,7	グループで試行錯誤しながら「数学していく」授業
28	日本史 A	2022/11/7	・思考判断を求める発問！ ・資料集をプロジェクターで映す→わかりやすい（時間を節約）、今何をやっているか常に確認できる		ダジャレで知識が定着する！
29	日本史 A	2022/11/7	昭和初期の思考動向とそれと連動した政治状況・事件の説明が非常にわかりやすかった。2・26事件に至る陸軍内部の皇道派・統制派の方向性の違い、対立を俯瞰的に考えさせていて、戦争に至る日本を考えさせる内容であった。		皇道派・統制派のどちらにも偏らない客観性
30	世界史 B	2022/11/7	マグネットシートで答えさせる→他の班にわからないので考え続けられる...ナルホドと思いました。マネしたい。		・生徒と先生のやりとり ・板書による“図示”

校内相互授業参観 授業参観カードのまとめ

MDS 基礎で育成される能力との関連に関する項目

- ①科学的視点 ②論理的思考力 ③ICT 技術活用 ④データの収集・分析
⑤地域の課題との関連 ⑥課題発見力 ⑦他者との協働 ⑧表現力の向上

31	SS数学 I	2022/11/8	授業の流れが確認できる板書であった。最近 は、投影だけで終わってしまっていたので、黒 板で全体を見渡せるのが、いいと感じた。ま た、同じ所を授業した際に、自分はずいぶん教 え込んでしまっていたと感じた。今日、生徒の 話し合いの様子をみると、自分たちでどうすれ ばいいのかを考えていたので、基本は押さえつ つも生徒の思考を奪わないように工夫したいと 感じた。	2,7	生徒が考えていけるヒントの出し方や発問の仕 方
32	SS数学 I	2022/11/8	・前時の復習や授業のポイントが分かりやすく 板書されている ・各グループが意欲的に意見交換しながら活動 している	2,7	あまり説明しすぎない授業によって生徒の意欲 を引き出しています。
33	数学 I	2022/11/8	授業プリントに沿って進みながらICTを効果的 に活用しており、間延びしないメリハリのある 授業だと感じた。ICTだけでなく、予習した内 容の確認をペアで行い→個で問題解決→全体で 確認→発展問題をグループで解く、など形態を 変えて行っているの生徒は55分間フルで集中 して取り組んでいた。見ている側もあつという 間の55分間だった。途中まで足並みをそろえ て、後半でグループ活動をすることで、全員が 同じ理解度までたどり着けるのだと感じた。	2,7	形態を変えて55分フルで考えることで、全員が 同じところへたどり着ける授業
34	数学 I	2022/11/8	多項定理という発展的な内容について、ふたつ の捉え方・立式の仕方を用いて生徒が試行錯誤 しながらコツを掴んでいく過程が見られた。解 法を押し付けることがないので自分たちで作 り上げていく授業だと感じた。	7	対話を通して「数学する」
35	数学 I	2022/11/8	・プリントがよく考えられ、ていねいに作成さ れている。 ・今日の目標が明示されており、授業の最後に ルーブリックによる学びの振り返りができるよ うに工夫されている。 ・基礎から発展問題へと構成され、生徒の着実 な学力upにつながる。		よく考えられたプリントの活用
36	数学 I	2022/11/8	・生徒がわからないことを自ら質問するなど主 体的に学ぼうとする場面が見られた。 ・生徒同士で教え合い、協働的に課題解決を目 指そうとするクラスの雰囲気できていて好感 が持てた。		教えあい、学びあいの授業
37	数学 II	2022/11/8	・重要例題の解説について 生徒の思考の流れにそった解説で、何をやっ ているのか、何のためにやっているのかが明確 であった。そのため、いろいろな問題に対応で きる力がついていくのだろうと思った。また、 丁寧な板書で忘れていたことも確認できてい た。 ・対数について 教科書で学んでいることと日常生活のつなが りについて、クイズ形式という楽しい雰囲気 で知ることができた。先生の教材研究の深さ に感心した。生徒たちも興味をもって考えて いて、知っている内容と結びつく楽しさを味 わっていた。また、数的な感覚も養っていけ ると感じた。	1,4	生徒の目線に立った指導、教材の扱い方
38	日本史 B	2022/11/8	・話し合い（ペアワーク）、自分の考えを述べ る場面が度々あり、言語活動が充実していると 感じた。 ・高度な内容ではあるが、根本を理解したう えで自ら考えを持つ生徒がみられる。	2,7	民党と吏党の対立ポイントが明確で、政治の理 想と現実のギャップについても考えさせられ た。
39	日本史 B	2022/11/8	・板書が見やすく、今何が問われているのか判 る。 ・先生の話し方、声（質も量も）が非常に聞き 取りやすい（授業者にとってこれは重要なこ とだと改めて思いました）		先生の、生徒の発言の拾い上げ方！
40	物理	2022/11/9	・授業の最初に公式を板書し、ていねいに復習 させているところが良かったです。 ・書画カメラによる説明がわかりやすい!!	4	ICTの使い方（参考にしたサイトなど）とても勉 強になりました。

校内相互授業参観 授業参観カードのまとめ

MDS 基礎で育成される能力との関連に関する項目

- ①科学的視点 ②論理的思考力 ③ICT 技術活用 ④データの収集・分析
⑤地域の課題との関連 ⑥課題発見力 ⑦他者との協働 ⑧表現力の向上

41	物理	2022/11/9	・黒板に目標が明示されていた。また、反対に公式をまとめていた。 ・生徒が発言しやすい雰囲気であった。 ・生徒間で教え合う場面も多く動きのある授業でよかった。 ・プリントやchromebookを活用し思考させる場面が多くて良かった。 ・間の取り方や難儀している生徒へのフォローが適切であった。 ・書画カメラやchromebookでのシミュレーションなどICTの効果的な活用がされていた。 ・生徒の作業のペースに合わせた授業で深い学びにつながると感じたが、授業の展開には改善の余地もあるように感じた。	1,2,3,4,6,7	・しっかりと思考させる授業。 ・ICTの効果的な活用。
42	物理	2022/11/9	私自身の知識不足や理解力不足で解法はわからずじまいでしたが、計算で惑星の質量が求められることにロマンを感じ、計算したくなった。生徒はその関心の高さから、個々もしくは協力して解き進めており、感心した。アニメーションによるサポートは大きく、探して生徒に提示する教材研究も参考になった。	1,2	与えられたもの、知識をフルに活用して課題に取り組む生徒、解決したときに喜ぶ生徒。アンケートフォームも参考になりました。
43	物理	2022/11/9	木星と衛星の距離の求め方や公転周期の求め方を丁寧に示していました。公転周期を求める所が時間がかかっていたので、もっと簡単な方法で求めてもいいのではと思いました。言語活動ーお互い教え合っていて活発でした。ICTの使用ーシミュレーションサイトをしっかり活用していました。地学でも使ってみたいです。	1,2,3,4,7	直接求めることができないもの（未知のもの）を知る経験を生徒がすることができる。
44	物理	2022/11/9	・生徒が意欲的で、課題に対してとても熱心に取り組んでいた。 ・既習事項を活用して課題解決に取り組むことで、知識・技能の定着が図られている。 ・生徒同士による協働的な学びの場面が見られ、実習を通して思考・判断・表現等の向上が期待できると感じました。		楽しみながら力のつく授業
45	物理	2022/11/9	学習内容の中身が興味深いものでした。そのようにして星の質量を求められると初めて知りました！（詳細は私には難しく判りませんでした...）		生徒の真剣に取り組む姿
46	化学	2022/11/9	・実験の中で、前時の学習内容を確認でき、公式の理解に対する定着が図られている。 ・実験の場面で、公式の有用性を実感できるので、生徒の理解も深まると感じた。		
47	地理総合	2022/11/9	・学習規律が確立されており、生徒も集中して取り組んでいた。 ・生徒がICTを活用して自ら調べたことを発表→検索する力、発表する力につながっている。 ・生徒が主体的に学習に取り組む姿勢が見られた。		生徒がICTを活用して主体的に学びを深める授業
48	コミ英Ⅲ	2022/11/10	・落ち着いた授業態度でクラスのよい雰囲気が伝わってきた。 ・自分の考えを表現するためにタブレットや辞書など各自に合ったツールを活用して、自ら主体的に学ぼうとする姿勢が見られた。 ・グループ発表を通して、思考・判断・表現等がどのように深まっていくのか、次の時間が楽しみ		
49	コミ英Ⅲ	2022/11/10	ペアワークが充実しています。生徒が積極的に英語で話したり、長文で自らの考えを表現したりする姿勢を見せていたと感じます。	7,8	他の生徒の考え方、見方をとり入れながら、自らの考えを深めることができる活動ですばらしかったと感じます。
50	物理	2022/11/10	・生徒の興味関心が高く、先生の説明を全員集中して聞いていた。 ・先生の説明に対して、生徒のリアクション（「えー」とか「へー」とか）があり、疑問点を質問したり、理解を確かめたりする発言もあり、対話的に学びが深められていると感じた。		先生と生徒による対話的な深い学び

校内相互授業参観 授業参観カードのまとめ

MDS 基礎で育成される能力との関連に関する項目

- ①科学的視点 ②論理的思考力 ③ICT 技術活用 ④データの収集・分析
⑤地域の課題との関連 ⑥課題発見力 ⑦他者との協働 ⑧表現力の向上

51	現代の国語	2022/11/10	・同じクラスで私が授業をしたときとはクラスの雰囲気違って感じられ、落ち着いた授業態度に好感が持てた。 ・本文の表現を、身近な例を取り上げながらわかりやすく説明しており、生徒も理解が深まったと思う。		
52	公民（政治経済）	2022/11/10	指示が明確で声もハキハキしていて聞き取りやすい。構造改革の問題点について、生徒は自分なりの視点で思考を深めていた。スライドで使用する画像の選択が適切かつ生徒の興味を惹くものであった。	3,6,7	言葉を精選している。ポイントが分かりやすいパワーポイント。
53	世界史B	2022/11/11	・講義→グループ別学習→本時の目標理解への到達に至るまでの授業の構成・展開が鮮やか。 ・資料A・Bの比較読みを通して、書き手の意図を考えることで歴史的なものの見方・考え方が身に付くように学びが深まっている。 ・生徒の世界史に対する関心が高く、先生の問いかけに対する反応もよく、理解を実感しながら楽しく学んでいる様子がうかがえた。		歴史のおもしろさを実感できる授業
54	コミ英Ⅲ	2022/11/14	・生徒の意見交流の場としてICTが活用されている。これまでの授業参観で生徒の対話の場面で活用されているのを見たのは初めてでした。 ・生徒相互の意見交換を踏まえたうえで、自分の考えをまとめることにより深い学びへとつながっている。		「主体的・対話的な深い学び」に資するICTの活用
55	コミ英Ⅲ	2022/11/14	導入のkahoot!を使用した復習は、クイズ形式で生徒たちは楽しんで活動していました。jamboardで他のメンバーの意見も全員で確認することができ、最後に自分の意見を書く際の参考にもなるのでよいと思いました。	1,3,7	ICTの使い方など大変参考になりました。
56	政治経済	2022/11/14	・消費者問題についてその実例を動画で視聴することで、リアルに印象深く理解できるように工夫されていた。 ・高校3年生にとっては成年年齢の引き下げに伴ってこうしたトラブルに巻き込まれる可能性もあることから、自分ごととして真剣に授業を受けていた。		「絶対にだまされない」ための思考・判断・表現力を身につけよう
57	音楽Ⅰ	2022/11/14	・伴奏法に関わる用語や記号の知識を、実際の演奏で確かめることで定着できていた。 ・隣同士で確認しながら技能の習得を目指しており、対話的・協働的な学びの場面が多く見られた。 ・実際の音色から感じられるイメージを共有するなど、生徒の豊かな感性に触れるような働きかけがなされていた。今後の創作活動にも生かされると思う。		
58	音楽Ⅰ	2022/11/14	・私が生徒の時には一度も受けたことのない音楽の授業です。今はこのような授業がよく行われているのでしょうか？田村先生独自ののでしょうか？ ・いきなり歌ったように見えた「野ばら」がドイツ語できれいな歌声で驚きました！		・生徒の真剣な姿 ・「野ばら」のきれいな歌声
59	地学基礎	2022/11/16	ホワイトボードにグループで考えたことを記入し、先生がマグネットを置くことで評価していくシステムが興味深かった。実験室前の部分には、これまでの累積(小10個＝大1個)が掲示されており、授業後生徒がそこに付け加えていた。評価が可視化されており、グループ活動の活発さにつながったと思う。 また、確認プリントは間違いを正す問題で、わかりにくいその時代の代表的なことやもの、順番などを確認できていた。答え合わせのスライドもわかりやすかった。ぜひ、自分の授業においても活用してみようと思った。 動画の視聴も組み込まれ、これらについてももっと深く知りたいと思うような授業でした。	1,4,5	興味を引く授業の組み立て・流れ、確認プリントの内容
60	地学基礎	2022/11/16	私自身、興味を持って参観した学習内容でした。正に「道徳教育を推進する授業」でした！		様々な道具を使い、あきさせない授業展開

校内相互授業参観 授業参観カードのまとめ

MDS 基礎で育成される能力との関連に関する項目

- ①科学的視点 ②論理的思考力 ③ICT 技術活用 ④データの収集・分析
⑤地域の課題との関連 ⑥課題発見力 ⑦他者との協働 ⑧表現力の向上

61	MDS基礎	2022/11/16	・生徒が積極的に動いており主体的に学習に参加していた。 ・生徒が発言しやすい雰囲気であった。 ・生徒間で教え合う場面も多く動きのある授業であった。 ・各班で分担しながら作業を進めていた。	2,3,4,5,6,7	・活発で自主的な学習活動。 ・ICTの効果的な活用。
62	論理表現 I	2022/11/21	「住むなら秋田or東京」についてJamboardを使ってブレインストーミングを行っていました。気軽に書き込めるので私も使用してみたいと思いました。	2,3,7,8	このような表現活動を工夫して継続していくことで表現力が向上していくと思いました。
63	論理・表現 I	2022/11/21	Jamboardの付箋紙を利用してグループでの意見をまとめる活動が大変参考になりました。各班の付箋紙をスクリーンに投影して、クラス全体で確認してもよかったかなと思いました。	7,8	Jamboardの付箋紙を活用したグループ活動
64	コミ英 II	2022/11/22	授業内容確認のためのクイズを実施。ICTの本領を発揮し、生徒も楽しみながらゲーム感覚で熱心に取り組んでいた。クイズは専用ソフトを使って先生の自作だと知って驚きました。成績上位者がランキング表示されるので生徒のやる気もアップ!!		
65	数学応用	2022/11/22	生徒が作成した解答を自ら説明。自分の言葉で説明することで思考や理解も深まる。大学のゼミ形式の授業で本校の生徒はこうした授業スタイルで主体的に学びを深めることができると思う。		
66	地理 B	2022/11/22	生徒を引き付ける力、巻き込む力はさすがです。次々と質問して知識や理解の定着を図りつつ現代的な課題への関心を高め、問題意識を持たせることができていた。		
67	言語文化	2022/11/24	生徒同士の活動と教師が教えるところのメリハリがついていた。適度な緊張感があり、すべての生徒が集中して臨んでいた。	7,8	グループで書き下し文をつくり板書したものを皆で添削していた。
68	言語文化	2022/11/24	・生徒の活動のさせ方 ・班対抗で添削、チェック …参考になりました。 ・生徒に全てをあたえてしまわないで、生徒“裁量”を残している所は、私も似た様な事をしているので、印象に残りました。		・授業のテンポの良さ ・先生の“厳しい”チェック→督励（生徒との掛け合い）
69	体育	2022/11/25	ダンス発表会 生徒たちは多少緊張しつつも楽しんでた。グーグルフォームで、発表が終わるとすぐに評価ができ、ICTが有効に活用されていた。ダンスを創作する過程で、テーマやどんな工夫をするか、メンバーでの話し合いを通して思考・判断・表現等が確実に高められたと思う。		横高ダンス発表会 担任の先生方にも是非見てもらいたい。
70	現代の国語	2022/12/19	プレゼンソフトやGoogleドライブをうまく使っていた。生徒たちは、ただ楽しく発表し合うだけでなく、なぜ良いか、何を工夫したかなどを相手に伝えるように話していた。	2,3,7,8	班から発表する人を選ばせていたが、発表者とは別の生徒に推薦理由を言わせていた。発表者は2分でうまくまとめて話していた。

校内相互授業参観 授業参観カードのまとめ

MDS 基礎で育成される能力との関連に関する項目

①科学的視点 ②論理的思考力 ③ICT 技術活用 ④データの収集・分析

⑤地域の課題との関連 ⑥課題発見力 ⑦他者との協働 ⑧表現力の向上

71	国語科	2022/12/19	I C T 機器を効果的に活用して活発なコミュニケーションを促し、主体的に取り組む学習時間を確保している。	3,4,6,7,8	発言しやすい雰囲気の醸成
72	現代の国語	2022/12/19	ICT機器を生徒自ら用いて(グループに、全体に)発表することを主軸においた授業だった。個人的にはその中でもグループ代表の推薦者を別に選ぶという点が画期的だと感じた。なぜなら発表の機会を増やすだけでなく、「なぜ選んだのか」を説明する表現力(聞く・伝える)を養えるからである。(あくまで個人の感想だが、聞く人に対する評価の観点プリントだけでなく、説明者に対しても話す際のポイントがある程度明らかになっていれば発表しやすかったのかもしれないと少々感じた。←推薦者が堂々と発表していたことから)生徒が意欲的に発表する姿をたくさん見ることができ、大変勉強になった。	3,8	生徒が楽しく意欲的に発表できるような仕掛け
73	現代の国語	2022/12/19	評価欄においてキャッチコピーの評価が中心となるように最初に観点を設けており、プリントからも授業のねらいを確認できた。生徒によってポスター制作の慣れや、デザイン構想力などの個人差はあるものの、自分の意図を反映させようとしている生徒の活動が感じられた。テーマの設定と活動内容に、生徒がしっかりと興味と目的をもって取り組んだ成果が現れていた。発表者だけでなく、推薦者の発言もあり、共有や共感の機会が多く、生徒が授業に参加している実感を感じつつ授業を受けている姿が印象的だった。	2,3,6,7,8	I C T を活用する際の準備(端末、ソフトやアプリ、共有ドライブの活用等)
74	現代の国語	2022/12/19	グループ内プレゼンテーションでは、生徒が観点別にポスターを紹介したり、意見を出し合ったりできるように、評価シートに「評価の観点」を明示するなど、言語活動が活発に行われるための工夫がされていた。	3,7,8	クラス全員のポスターが見やすくなるよう、電子黒板だけでなくクロムブック上でも閲覧できるように共有化がされていた。
75	現代の国語	2022/12/19	古谷先生のライフワークとも言えるような辞書づくりがさらに進化(深化)を遂げたという感じで、たいへん楽しく参観させていただきました。生徒の発想の面白さと卓越した表現力、それを引き出した先生の指導力に感心しました。時間を区切った点、発表者を制限した点が授業の中に適度な緊張感をもたらし、メリハリのきいたテンポのよい授業になったと思います。Chromebookの使い方も勉強になりました。ありがとうございました。		古谷先生のコメントカ

数学科（数学Ⅰ）学習指導案

日 時	令和4年6月24日（金）3校時
実施場所	秋田県立横手高等学校 1年6組教室
対象生徒	1年6組（普通・理数科・男子16名+女子17名=計33名）
使用教材	高等学校 数学Ⅰ（数研出版）
指 導 者	教諭 堀川貴絵

1 単元名

第3章 2次関数 第2節 2次関数の値の変化

2 単元の目標

- ① 2次関数の値の変化やグラフの特徴について理解し，2次関数の最大値や最小値を求めることができる。
また，2次方程式の解と2次関数のグラフの関係について理解し，グラフを用いて2次不等式の解を求めることができる。（知識・技能）
- ② 2次関数の式とグラフとの関係について，コンピュータなどの情報機器を用いてグラフをかくなどして多面的に考察したり，2つの数量の関係に着目し，日常の事象や社会の事象などを数学的に捉え，問題を解決したりすることができる。（思考・判断・表現）
- ③ 2次関数の良さを認識し積極的に活用しようとしたり，粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断しようとしたり，問題解決の過程を振り返って考察を深めたり，評価・改善したりしようとする。（主体的に学習に取り組む態度）

3 生徒の実態

自分のひらめきや考えを意欲的に発表しようとする生徒がいる一方で、控えめな生徒も多い。個人差もあるので、ペアやグループでの活動を取り入れるようにしている。全体的には互いに教え合いながら、分からないところを解決しようとする姿が見られる。

4 単元の指導計画

(22時間)

1. 関数とグラフ (1時間)
2. 2次関数のグラフ (3時間)
3. 2次関数の最大・最小 (4時間) ※本時 3/4
4. 2次関数の決定 (1時間)
5. 2次方程式 (2時間)
6. 2次方程式のグラフとx軸の位置関係 (2時間)
7. 2次不等式 (6時間)
8. 章末問題 (3時間)

5 評価規準

項目	ア 知識・技能	イ 思考・判断・理解	ウ 主体的に学習に取り組む態度
内容	1. 2次関数が最大値・最小値をもつことを理解している。 2. 2次関数を標準形に変形して，最大値・最小値を求めることができる。 3. 2次関数の定義域に制限のある場合に，最大値・最小値を求めることができる。	1. 2次関数の値の変化をグラフから考察することができる。 2. 具体的な事象の最大・最小の問題を，2次関数を用いて表現し，処理することができる。 3. 定義域が変化するときや，グラフが動くときの最大値や最小値について，考察することができ	1. 日常生活における具体的な事象の考察に，2次関数の最大・最小の考えを活用しようとする。

6 本時の目標

グラフが動くとき、最小値・最大値を求めることができる。

7 本時の指導に当たって

GeoGebraを実際に操作することで、最小値・最大値を視覚的に確認できるようにする。また、グループで解答を考えさせて理解を深め、説明できるようにする。

8 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 3分	1. 前時までの授業を振り返り、 本時の内容を確認する。 問題 a は定数とする。関数 $y = x^2 - 2ax + a^2 - 1$ ($0 \leq x \leq 2$) について、次の問いに答えよ。 (1) 最小値を求めよ。 (2) 最大値を求めよ。		
展開 47分	2. 個の活動 ・問題(1)を解く。 ・全体で解答を確認する。 目標：グラフが動くときの最小値・最大値を求めることができる。 ・問題(2)を解く。 3. グループの活動 ・問題(2)を解き、最大値を求める際の場合分けのポイントをまとめる。 4. 他のグループに説明 ・グループ内の1人が他のグループで説明をする。 5. 全体で解答を共有する。 6. 練習を解く。	・今まで扱った問題と何が違うかを考えさせる。 ・軸の位置による場合分けが必要であることに気付かせる。 ・GeoGebraでグラフの移動を操作させながら、最大値がどのように変化し、どのような場合分けが必要なのかを考えさせる。 ・グラフをかくて考えることを強調する。 ・グループで考えた解答をホワイトボードにまとめさせる。 ・1つのグループに発表してもらう。 ・必要であれば、隣同士で相談させる。 ・早くできた生徒にはチャレンジ問題に取り組ませる。	グラフを活用したり、グループ内で教え合ったりしながら、最大値の考察をしている。(イ) [観察] 場合分けを考えることができる。(ア) [観察] 解答をまとめ、説明することができる。 類題が解ける。(ア) [観察]
本時の振り返り 5分	7. 本時のまとめと振り返りをする。		

令和4年度 義務教育課学力向上推進班による計画訪問（前期） 特定授業 研究協議会記録（数学科）

記録者 木元 大輔

I 日 程

【特定授業】

日 時：6月24日（金）10：50～11：45（3校時）

場 所：秋田県立横手高等学校 1年6組

対象生徒：1年6組

科 目 名：SS数学I

単 元 名：第3章 2次関数 第2節 2次関数の値の変化

授 業 者：堀川 貴絵

【研究協議会】

日 時：6月24日（金）11：55～12：50

II 研究協議会参加者

森元弘毅、田中武夫、堀川貴絵（授業者）、武埴章太、
木元大輔、高橋寿彦、神崎実香子、高橋幸央

III 授業者からの報告

- ・ミニホワイトボードにグループ内の意見をわかりやすくまとめ、他のグループへ説明することで、生徒の思考や理解を深めることができた。
- ・GeoGebraでグラフが移動する様子を見せながら授業した。今回は、あらかじめ関数等を入力してあるものをClassroomに配信したが、他のクラスでは生徒が自分でGeoGebra上に関数を入力して活用していたので、GeoGebraを生徒に早めに紹介してもよかった。
- ・授業の最後で、解法のポイントを生徒達から引き出すことができたが、それが次につながるかどうかは課題である。
- ・後半の問題演習で、ほとんど解くことができない生徒がいたので、今後フォローしていくことが必要になってくる。
- ・今回は、下に凸の放物線における最大最小の問題だけを扱ったが、上に凸の場合も授業内で触れることができれば、生徒の思考をさらに深めることができた。また、定義域の値も基本問題と演習問題で全く同じ問題を解かせたので、演習問題の定義域を変えたものを解かせれば、本質的な理解を促すことができた。

Ⅳ 参加者からの感想

【良かった点】

- ・他のグループの生徒から解法についての説明を受けることで、生徒は刺激を受けていた。
- ・個人で問題を解く段階では間違っていた生徒が多かったが、グループで GeoGebra を活用しながら協議したことで正しい解答へと修正されていた。
- ・全体で解答を共有する場面で、1つのグループの代表に発表させたが、最大値の値を求める説明の中で「軸から遠い点で最大値をとる」と言語化していて、本質的な理解ができているなど感じた。
- ・ICTの良さを最大限に活かした授業で、2次関数の最大・最小を求めるための場合分けの仕方を、実際にグラフを動かして見せることで生徒に気付かせることができていた。
- ・場合分けの仕方をまとめる際に一般化してまとめていたので、他の問題を解く際にも活用できるまとめ方だったので良かった。
- ・「aが動けばグラフはどうなるの？」という発問をすることで、生徒が関数からグラフを考察することができたので良かった。さらに、「どのようにグラフが動くの？」と発問することで、関数を観察する力をもっと高めることができた。
- ・グループ内の生徒を a, b, c, d と分けて、それぞれに役割分担していたのが良かった。
- ・説明する生徒が理解できていなくても、説明を受ける側の生徒から教えられて理解していたケースがあり、学び合いを実践できた授業であった。

【今後に向けて】

- ・GeoGebra でグラフの軸の表示を強調すれば、さらに理解が深まると思った。
- ・最後のチャレンジ問題を是非とも生徒に復習させて力をつけさせてほしい。
- ・授業のスピードについてこられない生徒もいて、教科書の予習段階でグラフが動くことが納得できずにいた生徒がグループ活動でも分からないままというケースもあって、グループ活動の難しさも感じた。
- ・プリントの「授業の目標」の空欄に今日の目標を記入しないまま授業を受けていた生徒が多かったので、スクリーンで投影して見せて記入させたほうがよかった。

V 指導助言（指導者 矢吹 義務教育課学力向上推進班指導主事）

- ・ 事前に「計算力をどのように高めればよいか」という質問をいただいていたが、小中学校の現場の先生方も同じ悩みを抱えている。算数・数学は積み重ねの学問であるため、個々の生徒でつまづいているポイントが異なるので指導が難しい。個々の生徒がどこでつまづいているのかを解明した上で個別指導することが根本的な解決につながる。個別指導して算数・数学ができたという成功体験を積みさせるように努力するしかない。
- ・ 個々の生徒のつまづきを認知することで、つまづきのある分野の問題を自動的に与えてくれるA Iドリルというものがあるので、個別最適化学習をさせるには有効かもしれない。週に1回、A Iドリルで演習する時間を設定することができれば、教師側で個々に個別指導しなくても、生徒の計算力を向上させることができるかもしれない。
- ・ 今日の授業で生徒全員に理解させたいポイントは何なのかを明確にすることが大事。そして、生徒に問題を解かせるときにどのぐらいの生徒が解けているのか状況を把握した上で柔軟に説明の分量を変えていくようなメリハリをつけてやってほしい。全員が解けてほしい問題の確認で、理解できている生徒に発表させてしまうと、理解できていない生徒は理解が進まないままになってしまうので、理解できた生徒にはヒントになるキーワードだけ言わせる等の工夫をして、自分の力で解けた、理解したという実感をもたせてほしい。
- ・ 田中先生の問題演習の授業で、生徒に「この問題を解くためのポイントは何だった？」と発問して生徒に説明させていたのが良かった。プリントの最後に、授業のポイントを書かせる欄を設けて生徒に書かせると、授業のまとめの蓄積が生徒の武器になる。
- ・ 今、算数・数学で求められていることは、自由に考えることができる生徒の育成である。数学科として、是非ともチャレンジ精神のある生徒を育成する授業を意図的に展開してほしい。そして、生徒にも自由に考えることができる人材が社会で活躍できるということを伝えてほしい。

VI 指導助言（指導者 煤賀 義務教育課学力向上推進班指導主事）

- ・横手高校はICTを積極的に活用した授業が盛んだと聞いていた。自分自身はICTをなかなか活用できないでいたが、これからの時代はICTを活用した授業に積極的にチャレンジしていかなければいけない。ICTを使って何をすべきなのかというアイディアはICTを活用してこなかったベテランの先生方がむしろ多く持っている。数学科の中で互いに風通し良く相談し合いながら、ICTの活用方法を模索していけばよい。しかし、アナログで行う良さもあるので、ICTで全てを教えずに、場面に応じてアナログとデジタルの両方の良さを活かしながら授業を行ってほしい。
- ・グループ活動における学び合いの中で言語化しながら説明することで、数学的な表現や記号とか用語の良さを理解することができる。また、話すことで学んだ内容を客観化して理解を深める効果も期待できる。そして、生徒が納得したり理解を深めたりすることで、生徒の数学を学ぶ意欲を高めることにつながる。
- ・授業内でつまずきの見られる生徒に対しては別の手立てが必要である。今年度の1年生から新学習指導要領が導入され、指導と評価の一体化とか主体的に学習に取り組む態度の評価が求められている。これは、授業中であれば、生徒達がどれくらい理解できているかを把握して、それに対して反応を返してやることなのである。例えば、生徒が発表したことに対して「いいね」と褒めるといったように、生徒の活動に対して良いところを積極的に評価してあげることが大事である。それが、生徒の粘り強く努力するエネルギーになる。逆に頑張っているけど伸びない生徒に対して、適切に指導してあげること、生徒が自ら調整しながら努力する力を伸ばすことができる。そのためには、授業内の声掛けや授業の振り返り、個別の面談等を実施しながら学力差がある生徒集団を丁寧に指導する姿勢が求められている。場合によっては、ノートの取り方やパソコンの使い方、授業内容のまとめ方等のしつけをしてもいいのかもしれない。そのような、個々の生徒を丁寧に見取りながら評価することで、生徒達の学ぶエネルギーを育てていくことにつながる。
- ・授業内で教師側が話す内容を精選しながら、授業の進度を確保するという姿勢も必要。
- ・アクティブラーニングに関しては、様々な実践事例があるので参考にしてほしい。
- ・計算力の育成に関しては、AIドリルの機能を持った駿台 atama+というものもある。授業内では、意図的に複雑な計算を要する問題を生徒に解かせて、効果的な計算方法を全体で確認しながら地道に指導することが計算力向上につながる。
- ・週一回の小テストで生徒の理解度を教師側で把握し、生徒側は小テストで学習ペースをつかみながら自分で学習していく自走する力を育てていくことができる。
- ・学力形成に王道はないので、着実な指導をお願いしたい。
- ・横手高校には、将来大学卒業後に地元である秋田や県南部の将来のことを考えることができる生徒を育成する使命がある。そのためには、大学進学の中核を担う数学においてICTを活用した先進的な授業を実践し、別の学校に転勤した際にICTを活用した授業方法を広めていってほしい。

数学科（数学Ⅰ）学習指導案

日 時	令和4年10月21日（金）3校時
実施場所	秋田県立横手高等学校 1年1組教室
対象生徒	1年1組（普通・理数科・男子17名+女子17名=計34名）
使用教材	高等学校 数学Ⅰ（数研出版）
指 導 者	教諭 木元大輔

1 単元名

第4章 図形と計量 第2節 三角形への応用

2 単元の目標

- ①三角比の意味や相互関係について理解し、1つの三角比の値から残りの三角比の値や角の大きさを求めることができる。また、正弦定理や余弦定理を用いて、三角形の辺の長さや角の大きさを求めることができる。
（知識・技能）
- ②図形の構成要素間の関係を三角比を用いて表現し、定理や公式を導くことができる。また、空間図形において、適当な三角形に着目して考察し、辺の長さや角の大きさを求めることができる。
（思考・判断・表現）
- ③事象を図形と計量の考えを用いて考察するよさを認識し、問題解決にそれらを積極的に活用しようとしたり、粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断しようとしたり、問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとする。（主体的に学習に取り組む態度）

3 生徒の実態

意欲的に学習に取り組む生徒が多く、落ち着いた態度で授業に臨んでいる。比較的ほとんどの生徒が数学を得意としているが、計算力や思考力が乏しい生徒も数名いるため、ペアやグループでの活動を取り入れるようにしている。難しい問題ほど互いに教え合いながら解決しようとする姿が見られる。

4 単元の指導計画

（25時間）

1. 三角比 (2時間)
2. 三角比の相互関係 (2時間)
3. 三角比の拡張 (6時間)
4. 正弦定理 (1時間)
5. 余弦定理 (1時間)
6. 正弦定理と余弦定理の応用 (7時間) ※本時 7 / 7
7. 空間図形への応用 (4時間)
8. 章末問題 (2時間)

5 評価規準

項目	ア 知識・技能	イ 思考・判断・理解	ウ 主体的に学習に取り組む態度
内容	1. 30° や 60° 、 45° を含む直角三角形の辺の長さの比を理解している。 2. 直角三角形の辺の長さを三角比で表すことができる。 3. 正弦定理を用いて、2つの角の和の正弦を求めることができる。	1. 平面図形において、適当な三角形に着目して考察し、2つの角の和の正弦を求めることができる。	1. 日常生活における具体的な事象の考察に、図形と計量の考えを活用しようとする。

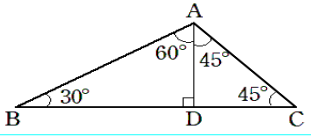
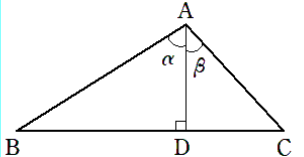
6 本時の目標

2つの角の和の正弦を求めることができる。

7 本時の指導に当たって

直角三角形の辺の長さの比を利用して $\sin 105^\circ$ の値を求め、その解法を一般化して $\sin(\alpha+\beta)$ を求められるようにする。また、グループで解答を考えさせて理解を深め、説明できるようにする。

8 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び方法
導入 3分	1. 本時の内容を確認する。 目標：2つの角の和の正弦を求めることができる。		
展開 47分	2. 個の活動 【確認問題】 右の図において、 $AD=1$ とする。 次のものを求めよ。 (1) $\angle BAC$ の大きさ (2) 線分 AC , BC の長さ (3) $\sin 105^\circ$ の値		直角三角形の辺の長さの比や正弦定理を用いて、2つの角の和の正弦を求めることができる。(ア)〔観察〕
	・確認問題を解く。 ・全体で解答を確認する。	・必要であれば、ペアで相談させる。 ・直角三角形の辺の長さの比を利用できることに気付かせる。	
	3. グループの活動 【チャレンジ問題】 右の図において、 $AD=1$ とすると、 $\sin(\alpha + \beta) = \sin \alpha \cos \beta + \cos \alpha \sin \beta$ (α, β は鋭角) が成り立つことを示せ。		
	・グループで協議しながら チャレンジ問題に取り組む。	・確認問題の解法を参考にするように 全体に呼びかける。	
	4. 他のグループに説明 ・グループ内の1人が他のグループで 説明をする。 5. 全体で解答を共有する。 6. 補充問題を解く。	・グループの代表者に、小型ホワイト ボードに書いた解答を使って説明させ る。 ・1つのグループに発表してもらう。 ・黒板に小型ホワイトボードを貼って 説明させる。	
本時の振 り返し 5分	7. 本時のまとめと振り返りをする。		

令和4年度 義務教育課学力向上推進班による計画訪問（後期）
特定授業 教科協議会記録（数学科）

記録者 木元 大輔

I 日 程

【特定授業】

日 時：10月21日（金）10：50～11：45（3校時）

場 所：秋田県立横手高等学校 1年1組

対象生徒：1年1組

科 目 名：SS数学I

単 元 名：第3章 2次関数 第2節 2次関数の値の変化

授 業 者：木元 大輔

【教科協議会】

日 時：10月21日（金）11：55～12：50

II 教科協議会参加者

鈴木亘、田中武夫、堀川貴絵、武埴章太、千葉将仁

木元大輔（授業者）、高橋寿彦、神崎実香子、高橋幸央

III 授業者からの報告

- ・ 三角形の3辺の長さが分かっている条件だったので、生徒達は余弦定理を利用して計算していたが、この授業をきっかけにして正弦定理と余弦定理で計算が楽なのはどちらかという観点で今後問題演習してもらえたらいいと思う。
- ・ チャレンジ問題は予想以上に生徒が解くのに時間がかかっていたので、机間巡視しながらヒントを与えたが、辺の長さを三角比で表すことに慣れていなかった。
- ・ グループ活動では、活発に意見交換して活動してくれた。
- ・ ホワイトボードに書かせて発表させたが、記述する内容が多すぎて見えにくかったのが反省点だった。そのため、急遽 iPad で写真撮影したものを投影して発表させた。
- ・ 発表させた内容にあまりふれることなく、講義式で説明する形になってしまった。
- ・ プリント裏面の補充問題を扱うことができなかった。今後の授業中で確認していきたい。

IV 参加者からの感想

【良かった点】

- ・指名された生徒が解答だけではなく数学的に説明しながら発表していてよかった。
- ・予定通りにはいかなかったが、しっかり 1 時間の内容として完結することができていた。
- ・非常に難しい内容だったが、生徒達は粘り強く計算してグループで協力しながら活動していたのがすごいなと思った。
- ・生徒達は色々な知識と計算技術を駆使して問題演習に励んでいた。
- ・ほとんどの生徒が確認問題を理解していたので、一定水準の目標は達成できた。
- ・確認問題が非常に有効で、以後の問題の大きなヒントとなっていた。
- ・余弦定理で解いて苦労した経験があるからこそ、正弦定理の解法の有効性を痛感するので、そのような経験を積ませることができた授業でよかった。
- ・1 年生の段階から文字式の問題に取り組ませていてよかった。

【今後に向けて】

- ・生徒達が確認問題と演習問題との関わりに気付けていなかったなので、解かせる前に全体で確認問題との関わりに気付かせることで、スムーズに進めることができたかもしれない。
- ・今回の内容は、最初から写真で撮影して発表させる分量だった。そうすれば、授業後に Classroom で配信して解答を共有することもできる。
- ・MDS 基礎で幾何学的に $\sin 15^\circ$ を求める説明を生徒達にしてあったので、そこに関連付けて授業を進めることもできた。
- ・余弦定理と正弦定理のどちらで解くのが簡単なのかを比較させれば効果的だった。
- ・チャレンジ問題で生徒達に自由に解かせていたから、生徒達は自分自身で解法を見つけ出すことができたので、解法を限定させなくてよかったという見方もできる。
- ・生徒に説明させた時に図形も投影できていれば、生徒は説明しやすかった。
- ・グループ活動の構成メンバーによって演習の進み方が変わってくるので、どのようにグループを組ませるかは今後の課題である。

V 指導助言（指導者 煤賀 義務教育課学力向上推進班指導主事）

- ・「3辺の長さが分かっていたら余弦定理」という型にはめることは初歩の段階では重要であるが、今回の授業はその型が有効ではない場面もあるということを生徒に気付かせる内容であった。結果とすれば1時間で収まる内容ではなかった。
- ・生徒がどのような解答をしてくるのか事前に想定しておくことが大事である。
- ・科目横断的な授業が展開できれば、生徒の理解が深まるので積極的に取り入れてほしい。
- ・全体的に生徒達の発言を拾いながら温かく進める授業が多く、発表させる際に根拠や理由も生徒に述べさせていた。
- ・高等学校においては、勤務する学校によって授業の組み立て方が変わってくるので、横手高校数学科としてどのような授業をするべきなのかを協議してほしい。
- ・協働的な学びでグループ活動をさせると思うが、進学校として最後は個人で解けなければいけないので、グループから最後に個に戻してあげなければいけない。
- ・観点別評価において、主体的に学習に取り組む態度の評価をどうすべきか、どのように客観性をもたせるか、評価基準について数学科で共通理解を図ってほしい。

VI 指導助言（指導者 矢吹 義務教育課学力向上推進班指導主事）

- ・高校数学において、数学は孤独な学びなのか協働的な学びなのか。大学入試で問題を一人で解くことができるという孤独な学びに目標を据えがちではあるが、世界的な流れとして知識を共有してチームの力で問題解決する力が求められている。授業の中で、生徒達がコラボして難問を解決するという経験を積ませることが、今の教育の裏の目標である。
- ・先生方は生徒達の学びをコーディネートしてほしい。机間巡視して生徒達の解法をよく観察した上で、どのような順番で生徒に発表させればクラス全体の理解が深まるかを考えて授業を組み立ててほしい。その際に、あえて解答が途中で止まっている生徒を指名して発表させて、解答が進まない理由をクラス全体で共有して、解決策を他の生徒に発表させる。このようにスモールステップを何人かの生徒の力で乗り越えさせるような流れを作してほしい。
- ・問題解決型の授業をする際に、導入で生徒達の心に「解きたい」と思わせることが大事。なぜ今日はこのことを勉強しなければいけないのかを生徒に訴えかけることで、生徒達の学習意欲を高めることができる。
- ・意味のないグループ学習にしてはいけない。生徒がそれぞれ自分自身の考えをもった上で協議するのが真のグループ学習であるので、事前に家で解いてきた解答を説明し合うような形でグループ学習を取り入れてほしい。
- ・今日の授業の大事なところは何だったのかを、授業の最後に確認してほしい。授業の大事なと思う部分を生徒に発表させてもよい。
- ・生徒のつぶやきに耳を傾けてほしい。良い考えをもっているが自信がなくて発表できない生徒を見つけて、その生徒に発表させることで自信をつけさせてほしい。
- ・よい授業を教師のみならず生徒とも共有させてほしい。

令和4年度 横手高等学校公開研究授業実施要項

研修部

- 1 目的 近隣の小・中・高等学校・支援学校の教員に授業を公開し、意見を交換し合うことで、今後の授業改善に役立てるとともに、校種間の連携の在り方を考える。
- 2 研究主題 「多角的な見方で考察し、根拠に基づいて発言する態度の育成」
- 3 期 日 令和4年11月9日(水)、11月21日(月)
- 4 会 場 秋田県立横手高等学校 各教室
- 5 案内送付先 横手市内小学校(14校)・中学校(6校)・高校(本校定時制含め6校)・支援学校
南教育事務所、横手市教育委員会

6 公開授業

期日	校時	教科 (科目)	単元名・題材名	対象	場所	授業者	当日の 協議会
11月9日 (水)	1	理科(物理)	万有引力	23組	物理地学 講義室	小西弘麿	放課後
11月21日 (月)	2	英語 (論理表現Ⅰ)	Unit15 Extracurricular Activities	16組	16HR 教室	深沢隆彦	3校時
11月21日 (月)	2	保健体育 (体育)	柔道	21・22組	武道場	齊藤孝弘	

7 感染症対策

- (1) 発熱等の症状がある場合は参加を辞退してもらう。
- (2) 受付で参加者の健康確認を実施する(発熱等症状の有無)。
- (3) 校内ではマスクを着用、教室に入る前後に手指消毒してもらう。

8 その他

- (1) 校外からの参観者の応対は研修部員が行う。
- (2) 授業者は、学習指導案を授業実施日の前日まで、研修部(木村)に提出すること。
データは次のフォルダに入れること。
GYOUMU43 分掌→研修→R4→公開研究授業→学習指導案
- (3) 参観者は、アンケート用紙に感想・意見等を記入の上、授業者へ提出すること。
- (4) 研究授業後、各教科で研究協議会を開き、協議会記録をA4版1～2枚程度にまとめて研修部に提出すること。書式は研修部フォルダ内に準備してある。

令和4年度 横手高等学校公開研究授業実施要項

研修部

- 1 目的 近隣の小・中・高等学校・支援学校の教員に授業を公開し、意見を交換し合うことで、今後の授業改善に役立てるとともに、校種間の連携の在り方を考える。
- 2 研究主題 「多角的な見方で考察し、根拠に基づいて発言する態度の育成」
- 3 期 日 令和4年12月16日(金)、12月19日(月)
- 4 会 場 秋田県立横手高等学校 各教室
- 5 案内送付先 横手市内小学校(14校)・中学校(6校)・高校(本校定時制含め6校)・支援学校
南教育事務所、横手市教育委員会、秋田大学教育文化学部

6 公開授業

期日	校時	教科 (科目)	単元名・題材名	対象	場所	授業者	当日の 協議会
12月16日 (金)	5	地理歴史 (歴史総合)	冷戦と世界経済 キューバ危機	16組	16HR 教室	津川威智夫 木村留衣子	放課後
12月19日 (月)	6	国語 (現代の国語)	書く「宣伝のことば」 ーポップ・広告」	14組	14HR 教室	古谷祥多	

7 感染症対策

- (1) 発熱等の症状がある場合は参加を辞退してもらう。
- (2) 受付で参加者の健康確認を実施する(発熱等症状の有無)。
- (3) 校内ではマスクを着用、教室に入る前後に手指消毒してもらう。

8 その他

- (1) 校外からの参観者の応対は研修部員が行う。
- (2) 授業者は、学習指導案を授業実施日の前日まで、研修部(木村)に提出すること。
データは次のフォルダに入れること。
GYOUMU43 分掌→研修→R4→公開研究授業→学習指導案
- (3) 参観者は、アンケート用紙に感想・意見等を記入の上、授業者へ提出すること。
- (4) 研究授業後、各教科で研究協議会を開き、協議会記録をA4版1～2枚程度にまとめて研修部に提出すること。書式は研修部フォルダ内に準備してある。

国語科 現代の国語 学習指導案

日 時 : 令和4年12月19日(月) 6校時
 対象生徒 : 1年 4組 33名
 場 所 : 1年 4組 教室
 使用教材 : 『現代の国語』(筑摩書房)
 指導者 : 古谷 祥多

1. 単元名

「宣伝のことは」を書こう

2. 単元の目標

- ①実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項 エ)
- ②目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にすることができる。(書くこと (1) ア)
- ③読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直すことができる。(書くこと (1) エ)
- ④言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。〔学びに向かう力・人間性〕

3. 単元について

(1) 教材観

クラスで作成した「辞書」の宣伝ポスターを、「コピー」を入れて作成するという単元である。既習単元で「14組辞典」を作成している。この辞書に「キャッチコピー」という形で修辭的で人の目を引く言葉を適切に使うことと、「ボディコピー」といった形で適切に説明をすること、加えて学習所産の他者との交流を通して推敲につなげることをねらいとして単元を構想した。なお教科書では既読の本についてポップやポスターを作成するという形で単元が設定されている。

(2) 生徒観

男子16名、女子17名。現代の国語に対する学習意欲は高く、ペアワークやグループワークなど、考えを交流する活動に対して積極的な態度で臨む傾向にある。書くこと領域に関する既習事項としては、「ことはがつくる女と男」を学習した際に、本文を模倣する形で三段構成で文章を書くという単元を行っている。また、「14組の辞書を作ろう」と題して、自分の選んだ言葉を、言葉によって説明するという単元を実施している。出来上がった語釈をクラス全員集約して一つの小冊子にすることで、辞書の体裁に仕上げるというものである。記述問題の解答において空欄が見られること、主述のねじれなどの文法的な齟齬が見られることから、「書くこと」に抵抗感を持っている生徒がいるということに課題がある。

(3) 指導観

親しみやすい題材を用いて「キャッチコピー」および「ボディコピー」を作成することで、伝わりやすく、読み手を引き付ける文章の構成や内容を工夫する言葉の力をはぐくむ。また、本単元に先駆けて実施している「14組の辞書を作ろう」では、近年 Google classroom および Google form 等を活用して、一人一台端末である Chromebook により語釈の執筆を行っている。「書くこと」領域の単元については、その特性から集約や評価、また生徒同士の交流や相互評価などの準備を行うことが教員の負担となっていた。国語の授業において ICT 端末を活用することにはデメリットもあるものの、「書くこと」領域におけるそれらの負担を軽減するうえで大変効果的である。本単元ではその活用に関する一つの試案を示したい。

4. 単元の評価規準

項目	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
内容	①実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知識及び技能〕(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項 エ)	①目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にしている。(書くこと (1) ア) ②読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直している。(書くこと (1) エ)	①進んで発表に取り組み、自他の文章を比較し、特長を捉え、表現に活かそうとする中で、自らの学習を調整しようとしている。〔学びに向かう力・人間性〕

5. 指導と評価の計画（全3単位時間想定）

次	主たる学習活動	評価規準【評価の観点】	評価方法
1	○単元の目標や進め方を確認し、学習への見通しをもつ。 ○コピーについての基本的な知識の確認をする。	[知識・技能] ①	行動分析
2	○コピーを含むポスターの作成を行う。 ○自分の作成意図・工夫した点などの確認を行う。	[思考・判断・表現] ①	記述の点検
3 (本時)	○グループ内プレゼンテーションを行う。 ○相互評価を行う。	[思考・判断・表現] ② [主体的に学習に取り組む態度] ①	行動分析 記述の点検

6. 本時の計画

(1) 本時のねらい

発表を行い工夫について観点別に相互評価をすることによって、効果的な文章表現のポイントを理解する。

(2) 展開

	学習活動	教師の支援	評価方法
導入 5分	①本時の流れを把握する。 ②学習課題を把握する。	・見通しを持って学習に取り組めるように学習課題を提示し、グループ発表と相互評価を行う予告をする。	
学習課題：効果的な宣伝のことばの特長は？			
展開 45分	③自分の作成したポスターを確認する。 ④グループで発表を行い、相互評価を行う。 ⑤グループ代表は全体発表を行う。 ⑥グループ発表や代表者発表のポスターの工夫や特長から、自分の表現に活かせることを考える。	・自分のポスターについて工夫等について紹介できるよう、確認の時間を確保する。 ・Chromebook 上でクラス全員が相互に作成したポスターが見られるように共有権限の処理を行う。 ・デザイン等だけの評価にではなくコピーにしっかりと着目できるように観点別の評価シートを用意する。 ・手元でもポスターは確認できるが、発表者がプレゼンテーションしやすいように Chromebook を電子黒板に繋ぎ拡大投影する。 ・自他のポスターを再度見て、自分が気づかなかった工夫を言語化してワークシートに記入するよう指示する。	[思考・判断・表現] ② ・読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直している。(書くこと(1) エ)【行動分析・記述の点検(振り返りシート)】
まとめ 5分	⑦効果的な宣伝のことばの特長についてワークシートに記入する。 ⑧ワークシートをもとに、単元の学習で得られた気づきについて共有する。	・ワークシートに沿った形で、誰のどのような工夫が良かったか、自分の表現にはどのように活かすことができそうかについて発表するよう指示する。	[主体的に学習に取り組む態度] ① 進んで発表に取り組み、自他の文章を比較し、特長を捉え、表現に活かそうとする中で、自らの学習を調整しようとしている。(【学びに向かう力・人間性】)【記述の点検(振り返りシート)】

ICT活用を意識した「書くこと」領域の実践

秋田県立横手高等学校 教諭 古谷祥多

一 研究授業によせて

平成三十年告示の高等学校学習指導要領において国語科の科目の再編がなされ、共通必修科目として「現代の国語」が創設されたが、その契機となった中央教育審議会答申では次のように述べられている。

○高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと、話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

（下線は筆者による）

また、この答申を受けて、学習指導要領解説においては、「現代の国語」において三十～四十単位時間程度「書くこと」の授業時数を確保する旨明記された（表一）。なお、平成二十二年告示の高等学校学習指導要領解説では標準単位数四単位科目の共通必修科目「国語総合」（表二）について「書くこと」を主とする指導には三十～四十単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導することと示されている。今回の改訂において標準単位数二単位の「現代の国語」について三十～四十単位時間程度「書くこと」の授業時数を確保し、同じく標準単位数二単位の共通必修科目「言語文化」においても五十単位「書くこと」の授業時数を確保すること、これは、共通必修科目において、実質的に「書くこと」領域における授業時数を増加することになる。高等学校国語科における「書くこと」の実践がこれまで以上に要請されているといえる。

これらを踏まえて筆者は今年度「書くこと」領域の授業実践に積極的に取り組んできた。本実践もそうした位置付けの取り組みのうちの一つである。

各科目の「内容の取扱い」に示された各領域における授業時数

	〔思考力、判断力、表現力等〕		
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語	20～30 単位時間程度	30～40 単位時間程度	10～20 単位時間程度
言語文化		5～10 単位時間程度	【古典】 40～45 単位時間程度
			【近代以降の文章】 20 単位時間程度
論理国語		50～60 単位時間程度	80～90 単位時間程度
文学国語		30～40 単位時間程度	100～110 単位時間程度
国語表現	40～50 単位時間程度	90～100 単位時間程度	
古典探究			※

（※「古典探究」については、1 領域のため、授業時数を示していない。）

表一 各領域ごとの授業時数（『高等学校学習指導要領解説 国語編』より引用）

平成 21 年告示学習指導要領	平成 30 年告示学習指導要領
【共通必修科目】 国語総合（4 単位）	【共通必修科目】 現代の国語（2 単位） 言語文化（2 単位）
【選択科目】 国語表現（3 単位） 現代文 A（2 単位） 現代文 B（4 単位） 古典 A（2 単位） 古典 B（4 単位）	【選択科目】 論理国語（4 単位） 文学国語（4 単位） 国語表現（4 単位） 古典探究（4 単位）

（単位数は標準単位数）

表二 国語科の科目と単位数（『高等学校学習指導要領解説 国語編』より引用）

二 「これまでの現代の国語「書くこと」領域の実践について

今年度筆者が行った「書くこと」領域の実践は次の二点である。この他にも「読むこと」の実践においても関連指導の形で書く機会は設定してきた。

・「ことばがつくる女と男」三段構成で書いてみよう

教材本文で用いられている序論・本論・結論の三段構成の構造を理解し、その上でガイドに沿って自分で三段構成の文章を書いてみるというものである。序文の初めを「〇〇である。これまでは、△△」という型で、空欄を補充するような形に設定することで、頭括・双括型の基本となる「冒頭に主張を述べる」という書き方をさせる実践である。「書くこと」実践としては、内容よりも構成面での指導を意識した実践であった。

・「〇組の辞書を作ろう」

筆者がこれまでも「国語総合」における「書くこと」の授業として行ってきた実践である。エッセイを書くなどの前段階として、自分の選んだ言葉を、言葉によって説明するという単元を設定して実践してきた。構成というよりは内容面を意識した指導である。出来上がった語釈をクラス全員集約して一つの小冊子にすることで、辞書の体裁に仕上げるというものである(図一)。近年はGoogle classroom およびGoogle form等活用のためのオンラインセッションも兼ねて、一人一台端末であるChromebookを活用して語釈の執筆を行っている。

えすえすえいいみゆにけーしょん【SS 英語ロマンチックेशन】

英語の教科の一つ。主にコミュニケーション方法について学ぶ授業。英単語練習や文法練習、イラストの書き方についても学ぶ。

注：この授業で寝てはいけない

えむでいーえす【mds】横手高校で行われているデータサイエンス。

パソコンでプログラミングや情報を使った数学の授業。これによって苦しめられている人もいる。

えもい【エモイ】感情的な という意味の emotional の emo に形容詞化するための い をくっつけた造語。センチメンタルな、メランコリックな哀愁漂う心情を表す。得も言われぬのえもいではない。

おばあちゃん【おばあちゃん】美味しいものをたくさんくれるが、私を横綱と間違えてるのかと思うほど量が多い。食べきれないのでよると朝に分けて食べるのがおすすめ

あき【秋】夏と冬の間の涼しく爽やかな季節。木々の紅葉など、とても風情があり、少し寂しげな感じのする季節でもある。「食欲の秋」、「スポーツの秋」、「読書の秋」、「芸術の秋」などと言われる。

みすてりいしうせつ【ミステリー小説】私が好きなジャンル。主に、殺人事件が起こる。探偵と犯人がいて、巧妙な駆け引きが行われることもある。あつさり終わることもある。おすすめのミステリー作家は 東野圭吾、知念実希人。

みすてりいしうせつ【ミステリー小説】私が好きなジャンル。主に、殺人事件が起こる。探偵と犯人がいて、巧妙な駆け引きが行われることもある。あつさり終わることもある。おすすめのミステリー作家は 東野圭吾、知念実希人。

図1 「〇組の辞書を作ろう」学習所産(抜粋)

三 本単元「宣伝のいんげん」について

1 本単元の骨子

先述の「〇組の辞書を作ろう」実践と組み合わせた形で本単元を構想した。本実践はここで作成した「辞書」の宣伝ポスターを、「キャッチコピー」および「ボディコピー」を入れて作成するというものである。教科書では既存の本のポスターやポップ広告を作成するという学習活動が設定されていたが、「自分たちで作ったものを他者に向けて発信する」というという学習活動の方が、より意欲的に学習活動に取り組めるのではないかと考えた。

身につけさせたい言葉の力としては、「キャッチコピー」といった、修辭的で人の目を引く言葉を適切に使うことと、「ボディコピー」といった形で適切に説明をするという能力に加え、学習所産の他者との交流を通して推敲につなげる力である。

2 ICTの活用

先述の通り、先立って「〇組の辞書を作ろう」実践を行なっている。好きな語を選び、その語釈を執筆するというものである。以前はプリントに記入し、提出されたものを授業者が取りまとめていたが、一人一台端末の導入を契機として、Chromebookで入力し、Google form を用いて集約を行っている。

メリットとして、授業者の集約手順が大幅に効率化されたことが挙げられる。生徒全員の入力したものを一括してGoogle spreadsheet に書き出すことができる。加工も容易である。このような意味では「書くこと」の実践とICT活用は相性が良いといえる。

また、プリントで行っていた際は、各自の持っている辞書等を参考にするか、自分の語彙の範囲の中でしか

語釈執筆ができなかったが、検索によって知識の補完が可能になった。意図して行っていないが、今後総合的な探究の時間等との関連で、調べ学習のような活動とタイアップすることも可能である。

ペンを持たず、漢字等の用字についてもほとんど悩むことがないという、これまでの「書くこと」と言って想像されるであろう国語の授業とは形が大きく異なるものであるが、生徒と授業者にとつてのハードルを取り去るような形で実施することができるといえる。また、実社会においては、今や手書きで文章を書くことよりも端末による入力の方が多くなっていることは否めない。このことによって漢字や文法の学習が不要だということにはならないが、そういった表記面をある程度不問にして、指導事項を文章の構成や内容に絞って「書くこと」の授業を行うことができるようになるという見方もあるだろう。

ただし、デメリットとして、検索が容易で、コピーペーストも簡単にできてしまうことによって、書いてくる語釈がともすれば検索結果をなぞるだけのものになってしまう生徒もいる。必ずしもメリットだけが存するともいえない。思考力や表現力が適切に発揮されるような声かけや教師の支援が必要となる。また Google のサービスは総じて縦書きに対応していないという点も国語の授業を行う上ではネックとなることもある。

今回は一人一台端末の Chromebook を用いて広告を作るという内容のものが、教科書に「宣伝のことは」という単元が設定されているので、それを利用して「キャッチコピー」と「ボディコピー」の説明を行っている。要旨をまとめたスライド(図2)を使用して、説明は簡潔に行った。

宣伝のことは

各四組国語辞典の広告を作ってみよう

広告の情報

- アピールしたいこと
- キャッチコピー
- デザイン・レイアウト

注意すべきこと

- 実態とかけ離れていないか
- 多くの人の目に触れて差し支えないか
- 著作権等の権利侵害になっていないか

これを入れよう

「キャッチコピー」 & 「ボディコピー」

- 手に取りたくなる短いフレーズ

「キャッチコピー」

- キャッチコピーを読んで興味を持った人に訴える

「ボディコピー」

図2 説明に使用したスライド(抜粋)

生徒には Google classroom で課題配布を行い、まっさらな Google document に、自由に広告を作らせる。その際に、「キャッチコピー」と「ボディコピー」を入れることを条件として提示している。その他色使いやデザインは、特別に条件を出さず、著作権等の権利に配慮するということを念頭に置くように指示して作成に組み合わせた。Google classroom の課題配付機能を使用することで、作成の途中であってもこちらで進捗状況を把握することができる。インターネット上の画像をそのまま使用するなどの例も見られたので、この段階で見えたものは指摘して修正を行わせた。

3 「書くこと」実践として

①学習活動と文種について

「〇組の辞書を作ろう」実践は、「ことばをことばで説明する」という活動を通じて辞書の体裁に文集を作成するものではあるが、自分の好きなテーマについて短文で記述するという、作文についての心理的障壁を軽減するところにねらいがあるため、厳密に情報提供型 (Informative・NAEP の分類による) の文種にこだわって記述させることを目的としてはいない。叙述型 (Narrative) の要素が入るものも許容している。

「宣伝のことは」実践は、他者に対して手に取りたくなるような気持ちにさせるということを目的として行っているものである。書く分量としては少ないものの、叙述型 (Narrative)、情報提供型 (Informative)、説得型 (Persuasive) すべての要素が関連し得る「書くこと」の授業であるといえよう。

②活用型学力と間テクスト性の観点から

前の学習指導要領(平成二十一年告示)において「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校におい

「NAEP National Assessment of Educational Progress の略。NAEPには教育政策立案に必要な情報を収集するメインテストと学力変化を追跡調査するトレンドテストがあり、作文 (Writing) は両方で調査されている。メインテストにおける作文設問では、第四学年(小学校四年生相当)、第八学年(中学校二年生相当)、第十二学年(高等学校三年生相当)を対象として、叙述型 (Narrative)、情報提供型 (Informative)、説得型 (Persuasive) の三種類の文章力を測定している。

平成三十年告示の高等学校学習指導要領でもその考え方は引き継がれている（「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。」その際、生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮すること。」）。

これまで筆者は「読むこと」相互の間テキスト性^三に着目した実践を行ってきたが、本実践においては、自分たちが作った学習所産を再読し、その宣伝を書くという、「書くこと」相互の間テキスト性が発揮されるものであると考える。

本時は単元全時数三時間中の三時間目にあたる。前時まででコピーについての基本的な知識の確認（二時間目前半／全三時間）と、コピーを含むポスターの作成（二時間目後半／全三時間・二時間目／全三時間）を行っている。

書
二 辞書
書
辞典
収録！！
な 1冊
変える

生は通すようだ。最近のエアコンが室温を感知して自動的に暖房を切ってくれる。暖房になったのは高先生が寝てからでいいと言ったからだろう。風が暖かい。校中で静かすぎる。校内で次のラッフルが成立する。

やない
校れ！
辛書

HR

[illegible]

29

令和4年度横手高校公開研究授業 研究協議会記録（国語科）

記録者 松江 正彦

I 日 程

【研究授業】

日 時：12月19日（月）14：35～15：30（6校時）
場 所：秋田県立横手高等学校 1年4組教室
対象生徒：1年4組（35名）
科 目 名：現代の国語
単 元 名：『宣伝のことば』を書こう
授 業 者：古谷 祥多

【研究主題】

「多角的な見方で考察し、根拠に基づいて発言する態度の育成」

【研究協議会】

方 法：文書による授業への感想・意見の集約のみ実施した。

II 授業者からの報告

- ・新しい学習指導要領において、国語科の重点の一つとして「読む」偏重への脱却が挙げられている。しかしながら実態として高校国語の授業においては「話す・聞く」、「書く」のノウハウが十分に蓄積されているとはいえないのではないか。試案の一つとなるよう授業を構想した。
- ・またICT活用の機運も高まっている。本校においても一人一台端末の導入や各教室に一台ずつ単焦点プロジェクターの設置が完了して、ハード面の準備は整っている。他方、その活用方法の部分ではまだ進んでいない部分があるように思われる。その活用のあり方の一つの形として提示したいと考えた。
- ・反省点は多々あるが、活動と学習所産に重きを置きすぎて「どのような力が付くのか」という見通しが甘かったことが最大の反省点である。本校のSSHとしての側面等と関連させながら、今回の学習がこういう場面で活用されるという見通しを生徒に持たせられるような視野を持って授業づくりに取り組んでいきたい。
- ・

III 参加者からの感想

- ・生徒自身が作成したものの授業で用いたことで、生徒の関心が高まっていた。辞書の作成、キヤッチコピーの作成いずれも「言葉」に着目しており、学びがつながっていると感じた。
- ・学習課題を「ことばの特長」とすることで、用いる言葉を吟味したり、表現を工夫したりして作成していることがわかった。
- ・相互評価の観点として、デザインにまつわるものも入れていましたが、そこは省いたほうがより「ことば」という学習課題に注目できたのかもしれないと思いました。しかし、宣伝するうえではデザインも重要なので……難しいですね
- ・振り返りとして自分の宣伝を見直したとき、生徒達の筆がよく動いていた。発表を聞くこと

で得るものがたくさんあったのだろうと思う。

- ・発表（プレゼン）は、MDSをはじめとして他教科にも生きてくると感じた。（成田陽香）

- ・キャッチコピーについて

教科書的な捉えでは「読み手を引きつける」ものとなると思いますが、これだけではどうしてもデザインの方に目が向けられがちになってしまうと思っていました。しかし、古谷先生が「認知的不協和」を生じさせるものとして示してくださったことで、言語表現に着目させることができたのではないかと思います。最後のグループで発表した生徒さんの「まとめ」が本時のねらいをよく捉えていたと思いました。

- ・協働的な学びに関して

代表者を推薦した理由を発表させたのは、すばらしい手立てであると感じました。本時のまとめにせまるためのよいステップであったと思います。

- ・ICTについて

表現を共有するところで、端末の利点が活かされていると思いました。

（南教育事務所 高橋基樹）

- ・評価欄において、キャッチコピーの評価が中心となるように最初に観点を設けており、プリントからも授業のねらいを確認できた。
- ・生徒によってポスター作成の慣れや、デザイン構想力などの個人差はあるものの、自分の意図を反映させようとしている生徒の活動が感じられた。テーマの設定と活動内容に、生徒がしっかりと興味と目的をもって取り組んだ成果が現れていた。
- ・発表者だけでなく、推薦者の発言もあり、共有や共感の機会が多かった。生徒が授業に参加している実感を持ちながら授業を受けている姿が印象的だった。（宮原公）

- ・クロームブックを使いながらのグループワークを中心とした授業を拝見して、新時代の国語の授業を感じることができました。生徒たちも一生懸命でいい授業でした。

（今入直樹）

- ・古谷先生のライフワークともいえるような辞書作りがさらに進化（深化）を遂げたという感じで、大変楽しく参観させていただきました。
- ・生徒の発想の面白さと卓越した表現力、それを引き出した指導力に感心しました。
- ・時間を区切った点、発表者を制限した点が授業の中に適度な緊張感をもたらし、メリハリの効いたテンポのよい授業になったと思います。
- ・クロームブックの使い方も勉強になりました。（川越真紀子）

理 科(理型物理) 学習指導案

日 令和4年11月9日(水)1校時
 実施場所 物理地学講義室
 対象生徒 2年3組物理選択者16名
 使用教材 改訂版 物理(数研出版)
 指導者 小西弘磨

1 単元名

第1編「力と運動」 第4章「円運動と万有引力」 4「万有引力」

2 単元の学習目標

- (1) 惑星の運動に関する法則を理解する。
- (2) 万有引力の法則及び万有引力による物体の運動について理解する。

3 生徒の実態 2年3組

普通科理型の物理選択者男子12名女子4名の授業である。物理的な現象に対する興味関心が強い生徒が多い。基本的な知識は持っているが、科学的な思考の習熟度については練習量の不足もあり充分とは言えない生徒が多い。しかし、自分の力の範囲でまじめに取り組むことができる生徒ばかりである。

(3) 指導

関係式や法則などの根拠を基にして考えを深めるとともに、「観測データを元に直接には測ることができない物理量を知ることができる」ということが理解できるように指導する。

4 単元の指導計画 (6時間)

- (1) 万有引力の法則 (1時間)
- (2) ケプラーの法則・第1宇宙速度 (2時間)
- (3) 位置エネルギー・第2宇宙速度 (2時間)
- (4) ケプラーの法則～星の質量 (1時間)<本時1／1>

5 単元の評価規準

項目	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 観察・実験の技能	エ 知識・理解
内容	惑星の運動を理解しようとする。実習の手法や法則活用方法の理解に積極的に取り組み、授業に参加することができる。	惑星や衛星の運動における向心力を適切に判断し、ケプラーの法則を活用して運動について思考することができる。	周期的な運動について観察した結果を適切に処理して物理量を求めることができる技能を身につけている。	ケプラーの三法則や万有引力の法則を理解し、用いることで惑星の運動の様子が理解できる。

6 本時の目標

- ・望遠鏡による観測データを適切に処理する技法を学び、木星の質量を求めてみよう。

7 本時の指導にあたって

- ・運動方程式からケプラーの第三法則を導き出させる。(既習の内容の復習)
- ・衛星の公転半径と公転周期から木星の質量を求める式を導き出せることに気づかせる。
- ・感想と考察についてはGoogleフォームで記入させる。

8 本時の展開

過程	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 10分	・円運動や単振動の4種類の速さの表し方についてお互いの関係を復習する。 ・惑星や衛星の円運動において何が向心力になっているかを確認する。 ・Tバージョンの運動方程式からケプラーの第3法則を導く。 ・ケプラーの第三法則から公転中心の星の質量を求める方法を考える。	質問がある場合は補足して理解を助ける。 状況によってはプリントの③を変形すれば理解できることを補足する。 木星の大きさと比較すればよいことに気づかない生徒がいるときは周りの生徒に効くことを勧める。	意味が理解できておりケプラーの第三法則が導けるか。(エ)
学習課題:公転中心にある星の質量を求める方法の原理を理解する。			
展開 35分	プリントの写真からイオとエウロパの公転半径を求める。		比率から公転半径をメートル単位で求める式がつかれるか。(イウ)
学習課題:公転半径を求める。			
	シミュレータからx-tグラフを作成してグラフから公転周期を求める。	今回はシミュレータを用いるが、本当は写真を定期的に撮影してデータを得るということを補足する。	適切に長さを測りx-tグラフが描けるか。(ウ)
学習課題:公転周期を求める。			
	木星の質量を求める。		適切にデータを代入して計算ができるか。(ウ)
学習課題:木星の質量を求める。			
整理 10分	まとめの問題に取り組む。 感想や考察を記入する。	記入しているかを確認する。	関心を持って考察やまとめを書いているか。(ア)

令和4年度横手高校公開研究授業 研究協議会記録（理科）

記録者 小西弘麿

1 日程

【研究授業】

日 時：11月9日（水） 8：40～9：35（1校時）
場 所：秋田県立横手高等学校 物理地学講義室
対象生徒：2年3組（物理選択者15名）
科 目 名：物理
単 元 名：万有引力
授 業 者：小西弘麿

【研究協議会】

日 時：11月9日（水） 17：00～17：30

2 研究協議会参加者

岡本由佳子 細谷進 瀬々将吏 後藤直地 加藤華世 古関直哉

3 授業者からの報告

- ・大学入試を考慮して絶対に定着させたいと思っている内容は最初の10分の部分である。
- ・作業量が多く1時間では終わらないだろうと思いながら、残りは家庭や放課後にやらせても、それはそれでもよいと考えた。
- ・家庭学習になった場合はガリレオと宗教裁判のことなどに学習が波及し、道徳的な内容に発展して考えるような生徒も出るかもしれないとの思いもあった。そのために事後確認/感想記入フォームにもそれらしい記述を仕込んだ。
- ・縮尺を考えて実際の長さを求める式を作ることや計算時の10のn乗の処理を適切にやらせるための練習の意味もあった。
- ・正弦関数のグラフを描かせることは時間がかかってしまうが、ピークの位置を見極めることがほぼ不可能であり、変化の急激な横軸との交点を見て周期を調べるべきだという実感を持たせたいとの思いもあってあえてやらせた。
- ・周期の測定を48時間くらいにしたのは長周期の衛星の場合、もう少し長いデータ収集が必要になるという感触をもたせたいとの思いであった。
- ・実際の作業の中で数値や単位の扱いの不慣れさが授業中に生徒から出る質問として現れていたと感じる。

4 参加者からの感想（参観カードからの感想を含）

- ・模擬観測を行わせることで科学的な体験や先人の苦労などが実感できる題材だった。
- ・直接測定できない星の質量が学習した理論と観測から求められるということは生徒にとっても魅力的だろうと思われ、実際に作業をやり出すと夢中で生徒は動いていた。
- ・アニメーションや写真によるサポートなど教材研究が参考になった。
- ・確認のフォームが参考になった。
- ・導入時の公式確認が丁寧にされていてよかった。
- ・説明での書画カメラの利用がわかりやすいと感じた。
- ・測定精度については二乗になる周期よりも三乗になる公転半径が重要になると思われる。
- ・生徒同士が教え合うなど、生徒の動きのある授業でよかった。

- ・基礎基本の確認と応用の部分が明確に分かれていて生徒にもわかりやすかったのではないかな。
- ・書画カメラで映し出した式は黒板に残してあげた方が写し遅れた生徒のためになったのではないかな。
- ・単元の要所要所にこうした生徒が活動できる実習や実験があるとよいと感じる。
- ・自分の科目でも10の n 乗は別で計算させるように何度も言っているがなかなか完璧にならない。
- ・公転周期を求める作業を短縮するために違った方法を用いた方がよかったのではないかな。
- ・生徒が意欲的で課題に対して熱心に取り組んでいた。
- ・既習事項を活用して知識と技能の定着が測られている。
- ・生徒同士による共同的な学びの面が見られ、思考・判断・表現等の向上が期待できると感じられた。
- ・授業の展開の面で改善の余地があるように感じた。
- ・普段の生徒の計算の仕方を見ていると10の n 乗を記号のように見えていて数値としての認識が薄いような感触を得ることがある。
- ・パソコン世代だから10の n 乗も入力しようとしてしまう。入試に対応するためにも練習させる必要がある。

英語科「論理・表現Ⅰ」学習指導案

実施日時：令和4年11月21日2校時

場所：1年6組教室

対象：1年6組

授業者：深沢隆彦

教科書：GeniusⅠ（大修館）

1 単元名 Unit 15 Extracurricular Activities

2 単元の目標

- (1) 課外活動や職場体験についての英文を意欲的に読み進めることができる。
- (2) 関係代名詞や関係副詞を用いた英文の用法を理解し、活用することができる。
- (3) 関係代名詞や関係副詞を用いた文を使って、「住むなら秋田 or 東京」について英語で発表することができる。

3 単元と CAN-DO 形式での学習到達目標との関連

自分の興味・関心がある事柄について、相手に伝えることができる。【1年後期 話すこと（発表）】

4 単元観

本単元では課外活動や職場体験についての内容が取り上げられている。扱われている言語材料は関係副詞である。関係副詞はあるものを説明する際に詳しく情報を付け加えるために用いる。実際にあるテーマを議論し報告させる際に使用させることでその働きを理解させていく。

5 生徒観

ほとんどが英語学習に対して意欲をもって入学してきた生徒たちであり、素直で意欲的に授業に取り組むことができ、ペア活動等にも積極的に取り組んでいる。身の回りのことや身近なテーマについて主体的に表現させる機会を設けることで、生徒の意欲や自信につなげていきたい。

6 単元計画

1 時間目…Introduction、Model 1 文法事項の解釈

2 時間目…文法事項の解釈、演習、Model 2、整理、自己表現活動

3 時間目…「住むなら「秋田」か「東京」か」についての意見交換、発表 *本時

7 単元の評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
読んだり聞いたりした内容を、簡単な感想を述べるために、それらの表現を使うことができる。	伝えたい内容をまとめ、関係詞を用いて、わかりやすく伝えることができる。	グループワークに積極的に参加し、相手にわかりやすく説明している。

8 本時の学習

(1) 目標

- ①「住むなら秋田 or 東京」についての意見交換ができる。
- ②「住むなら秋田 or 東京」について関係詞を用いた文を使って発表することができる。

(2) 指導計画

時間	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 10分	・ Warm-up	○英語を使用する雰囲気を醸成させるための質問をすることで、使用言語材料への生徒の意識づけを行う。	
	・ 本時の目標を提示する。		
学習課題：住むなら秋田 or 東京について理由をつけて発表できる！			
展開 35分	・ グループ内で意見交換をする。(Jamboard 付箋紙を利用) ・ 個人の意見をシートに書く。 ・ グループとしての意見をまとめ、協力して原稿を作り発表する。	○ “I can use ~ in Akita.” “We will visit ~ where we ~ in Tokyo.” 等を用い、住みたい場所についての意見を交換する。モデルを示し、スムーズに活動に移れるよう促す。グループ討論を通して自分の意見を述べるように支援をする。 ○内容を説明するのに適切な英文を用意し、自分たちのグループの報告が相手に伝わるような英語を作ることができるよう指示する。 秋田派か東京派のどちらかの立場に立って意見をまとめていく。発表の際の助けになるようキーワードやポイントをシートにまとめるよう指示する。 例：“I like the idea of ~” “This is because ~” (This is because Tokyo is the place where SV~.)	B
まとめ 10分	・ 発表の中で使用された効果的な表現を再確認し、発表内容に対する教師のコメントを聞く。	○発表後に内容に関する質問をし、理解が深まるように配慮する。 教師からのフィードバックにより考えを全体で共有できるようにする。 ○発表の良かったところや今後に生かせるところを全体で共有する。	

令和4年度横手高校公開研究授業

研究協議会記録（英語科）

記録者 齊藤 千秋

Jamboard の活用について

うまく話せなくても、書く生徒は多いので、ジャムボードを活用したい。

アイデアをたくさん出させて、アイデアをもらった状態で文を作るのがよかった。

ポジティブな意見とネガティブな意見で、付箋の色を分けたのがわかりやすかった。

付箋に考えをまとめて整理することで、自分の考えを整理しやすくなり、文章化するときにスムーズに書くことができていた。

付箋アイデアのレベルから個人の意見をシートにまとめるまでの流れがスムーズだった。

意見交換してからジャムボードの付箋に書かせたり、出てきたアイデアをクラス全体でシェアする時間があればよかった。

ジャムボードを使うとブレインストーミングした内容を見渡せるので、その見渡せる状態を生徒が活用できる時間があればよかった。各グループがジャムボードの各1ページに付箋で書き込むので、その6ページを1人で見て、いろんなアイデアをもらいながら自分の意見を作っていくというように、ライティングを最後に持って行くと、個人の意見に変容が出てくる。

グループワークについて

グループ内で発表するとき、話す人にとって負担のない、よい雰囲気だった。

個人→グループ→クラス全体に発表と段階を踏んだ活動だったのがよかった。

最後は自分の意見を書くことになったので、グループである必要がなかった。

機械的にグループにするよりも、ジャムボードで出てきた意見に基づいて、同じ意見の人でグループをしたら、話し合いがもっと活性化したのではないだろうか。

ジャムボードに意見を打ち込む段階で、支持する立場が同じ人たちのグループで意見を出し合うと、もっとクリエイティブな活動につながったと思う。

秋田派と東京派に分けて、相手チームを説得する意見を言わせて、ディベートにしてもよかった。説得する意見を聞いて、最終的に自分がどう思ったか、個の意見を書かせるという展開も考えられる。

理由を考えやすい反面、同じような意見が出てしまいがちなテーマなので、3グループずつに分けてディベートで戦わせて、説得力のあるグループに投票させれば、ありきたりな理由だけでなく面白いアイデアが出るのではないかな。

その他

クロムブックを使わせると、自分自身の意見ではなくインターネット上に載っている意見を検索したり、自動翻訳機能を使ってしまったりする生徒がいる。紙の辞書を用いて自分の力で英作文を書かせる指導をしていかなければならない。

実践的指導力向上研修講座（高等学校8年目）を終えて

古谷 祥多

1. 研修の目標

自己理解に基づき、個々の個性・適性、分掌等に応じた資質能力の向上を図る。

2. 研修の日程

I 期 令和 4 年 6 月 15 日 10:00～16:15

①＜開講行事・オリエンテーション＞

②＜講義・演習＞ 不登校の未然防止と対応

講師 秋田県総合教育センター指導主事 小野寺 祐

③＜講義・演習＞ 学校組織の一員として ～自己理解に基づく目標設定～

講師 秋田県総合教育センター指導主事 八柳 英子

④＜講義・演習＞ カリキュラム・マネジメント

講師 秋田県総合教育センター指導主事 小松田 哲也

II 期 令和 4 年 8 月 8 日 10:00～16:15

①＜オリエンテーション＞ 日程説明等

②＜協議・演習＞ 授業評価による継続的な授業改善

講師 各教科担当指導主事

③＜協議・演習＞ 授業評価による継続的な授業改善

講師 各教科担当指導主事

④＜協議・演習＞ 授業評価による継続的な授業改善

講師 各教科担当指導主事

3. 講座の感想

(1) I 期について

全日程講義・演習の形で研修講座が開催された。

小野寺先生の講義の中では、不登校の未然防止として「居場所づくり」という話がなされた。I 期当時ちょうど本校では学校祭が開催されていて、このような学校行事もその役割を果たしている側面があるのだということを実感するものであった。

八柳先生の講義の中では組織の一員としての自分や学校の強みと弱みを自覚するための演習が設定されていて、自分や勤務校のことについて見直すきっかけが持てたことがよかった。自分や勤務校の取り組みについて付箋に書いていくというものであったが、「地域との連携」という項目についてなかなか書くことができず、この観点が少なくとも自分にとっては弱い部分であると感じた。

小松田先生の講義は内容もさることながら、初任研の際の写真を提示されながら、志はどうなっているかと問われたことや、もはや引っ張ってもらおうという意識ではないステージに入ったのだということなどが語られ、身が引き締まる思いであった。

それぞれの研修講座の内容を活用しながら、引き続き自分の教員としての資質に磨きをかけていけるよう励みたい。

(2) II期について

II期は、事前に各々研究授業を行い、撮影したうえでその学習指導案とビデオを持ち寄って研究協議を行うというのが主だった内容であった。筆者は言語文化の授業で「漁父之利」を扱った後に、同じ『戦国策』収載の「狐借虎威」を読み、複数の文章を比べることによって、戦国時代における寓話を用いた文章の傾向や特徴をとらえるということを目標に設定し、『戦国策』から我々はどのようなことを学べるか?という課題を提示して授業を行った。なお、学習指導案は次頁に示す。

研究協議では他教科の先生方とグルーピングがなされ、それぞれの授業ビデオを視聴しながら教科の垣根を越えて授業検討をし合うという形であった。初任研から授業等を拝見する機会があった先生方が円熟して授業改善に取り組んでいらっしゃる様子を見て取れて、大変いい刺激を受けた。特に能代高校の数学の先生の授業では、展開の中でICTを活用する形で「個別最適な学び」を意識した実践が行われていて、大変勉強になった。個を意識しすぎると、ともすれば協働的な学びと相反するものとなってしまいかねないが、それらの両立を図るためのヒントを得ることができたように考える。個別最適な学びは上手に機能すると理解度や定着度を高める効果をもつものである。是非今後の授業改善の観点としたい。

午後の最後の講座では、各教科に分かれて講座の振り返りを行い、教科に関する課題について、指導主事物部先生からのご助言をいただいた。授業における文学的教材の取り扱いや、新しい指導要領に沿ったカリキュラムや評価について、各校の事情を聞きながら検討できたことが大変参考になった。本校の運営の中で役立てていきたい。

4. 研修全体を通して

初任校に勤務して8年目となり、当然のことながらこれまでとは異なる態度や取り組みが必要になっていることを感じる。分掌業務でも、教えられるままにやっていたことを、自分なりの工夫を加えながら他の人に伝達するということが必要になる場面が増えてきている。I期の小松田先生の講座の中でもあったように、これからは学校を主導していく中核となる意識をもって、学校経営に寄与していきたい。

また、学習指導については、8年前と現在では、学校や生徒を取り巻く現状も変わり、それに伴いカリキュラムもまた変化してきている。授業のあり方もまた変化していく中で、大切な視点としては不易と流行をともに意識しながら、授業改善を常に心がけていくことであると考えている。初任のころより知識量は確実に増しているが、初任のころほどの情熱をもって教材研究に取り組んでいるか、常に自問自答しながら、目の前の生徒にとって価値のある授業に取り組んでいきたい。

国語科（言語文化）学習指導案

日 時 : 令和4年7月20日（金）2校時
 対象生徒 : 1年6組 33名
 場 所 : 16HR教室
 使用教材 : 『言語文化』筑摩書房
 指 導 者 : 古谷 祥多

1. 単元名 第9章 漢語の特色【故事成語を読む】「漁父之利」（『言語文化』筑摩書房）

2. 単元の目標

- ① 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、語感を磨き語彙を豊かにする。
 （第2 言語文化 2 （1）【知識及び技能】 ウ）
- ② 他の作品との関係を踏まえ、内容の解釈を深める。
 （第2 言語文化 2 （3）【思考力・判断力・表現力】 B〔読むこと〕 エ）
- ③ 漢文に現れた価値観を、現代的なものの見方と比較して、自分の考えを広げようとしている。
 （【学びに向かう力・人間性】）

3. 単元について

- （1）教材観 「漁父之利」は『戦国策』収載の故事。燕国に攻め入らんとする趙国の王恵文王を、蘇代が寓話を用いて説得するという構造。『戦国策』には他、同じく寓話を用いた「狐借虎威」なども収載されている。分量や句法、論理構造などの点で、漢文の入門期から一段階レベルの向上を図ることができる。
- （2）生徒観 男子16名、女子17名の学級で、漢文の既習単元はこれまで「推敲」のみで、その他言語文化では「児のそら寝」、「大江山」、「芥川」等を扱っている。漢文の句法等の知識理解はまだ入門段階であるが、学習意欲は高く、ペアワークやグループワークなど、考えを交流する活動に対して積極的な態度で臨む傾向にある。
- （3）指導観 生徒観を踏まえて、知識事項を押さえたうえで、思考力を伸ばす発展的な内容や活動的な学習形態を取り入れたい。教科書本文に関連した他の文章に触れ、グループワークの中で思考を交流し、戦国時代に説得の技法として頻繁に用いられた寓話の持つ効果について考えを深めさせたい。

4. 単元の評価規準

項目	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
内容	漢文に特徴的な語句の量を増し、語感を磨き語彙を豊かにしている。（第2 言語文化 2 （1）【知識及び技能】 ウ）	他の作品との関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。（第2 言語文化 2 （3）【思考力・判断力・表現力】 B〔読むこと〕 エ）	漢文に現れた価値観を、現代的なものの見方と比較して、自分の考えを広げようとしている。

5. 指導と評価の計画（総時数3時間）

	単元指導計画	評価規準【評価の観点】	
第1時	本文の訓読の仕方を確認し、書き下し文に改める。	返り点や漢文に特徴的な語句の読みに留意しながら本文を音読できる。【知識・技能】	行動分析
第2時	重要語や句形を確認しながら現代語訳を行う。	重要語や句形に留意しながら「蚌」や「鵲」の行動や発言を踏まえて、本文を現代語訳できる。【知識・技能】	記述の点検
第3時（本時）	「狐借虎威」を参考にしながら寓話の持つ効果について考える。	「狐借虎威」を参考に、内容の解釈を深めることができる。【思考・判断・表現】	行動分析 記述の点検

6. 本時の計画

(1) 本時のねらい

文章の特徴や表現の効果について、他の文章との関係を踏まえ、内容の解釈を深める。

(2) 展開

	学習活動	教師の支援	評価の観点及び方法
導入 10分	①「漁父之利」の結末部の内容を確認する。	・前時の内容を想起し、本時の内容にスムーズに入ることができるように説明する。	
展開 40分	②学習課題を把握する。	・見通しを持って取り組めるよう、学習課題を提示する。	
	学習課題：『戦国策』から我々が学べることは？		
	③用いられている句法（使役形）を確認する。	・現代語訳を中心に扱うが、部分的にでも漢文として触れることができるように句法の確認をする。	
	④出典の同じ『戦国策』収載の「狐借虎威」の現代語訳を読む。	・リード文を提示し、状況の整理をできるようにする。	
	⑤「漁父之利」と「狐借虎威」の共通点について話し合う。	・両者とも王に対する進言の場で寓話が用いられていることに着目できるように、共通点について問う。	
	発問：「漁父之利」と「狐借虎威」の共通点は？		
	⑥寓話を用いることにどのような意味があるかを話し合う。	・この2篇のみならず、戦国策の中で寓話が用いられている他の故事についても紹介する。	・他の作品との関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。（グループワーク／発表〈行動分析〉、ワークシート〈記述の点検〉【思考・判断・表現】）
発問：寓話を用いることにはどのような意味がある？			
まとめ 5分	⑦課題に対する振り返りを書く。	・学習課題「『戦国策』から我々が学べることは？」を再提示して、それをもとに自分の考えを記述できるようにする。	・漢文に現れた価値観を現代的なものの見方と比較して、自分の考えを広げようとしている。（ワークシート〈記述の点検〉【主体的に学習に取り組む態度】）

7. 協議の視点

◇主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

1年生の古文・漢文導入期において、文法や句法事項等知識伝達型の授業に止まらない主体的・対話的で深い学びのための授業を行うためにどのような点を意識すべきか。

教職5年目研修講座を終えて

成田 陽香

1. 研修の目標

学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導等についての実践的指導力の向上を図る。

2. 研修の日程

I 期 令和 4 年 6 月 22 日 10:00～16:15

- ① 〈開講行事・オリエンテーション〉
- ② 〈講義・演習〉教育相談と人間関係づくり
講師 秋田県総合教育センター指導主事 小野寺 祐
- ③ 〈講義・演習〉学校組織の一員として ——マネジメントの視点——
講師 秋田県総合教育センター指導主事 八柳 英子
- ④ 〈講義・演習〉生徒の実態を踏まえた授業改善①
講師 各教科担当指導主事

II 期 令和 4 年 9 月 2 日 10:00～16:15

- ① 〈開講行事・オリエンテーション〉
- ② 〈講義・演習〉発達障害のある生徒の理解と支援
講師 秋田県総合教育センター支援班 加藤 しお子
- ③ 〈講義・演習〉生徒の実態を踏まえた授業改善②
講師 各教科担当指導主事

3. 講座の感想

(1) I 期について

「教育相談と人間関係づくり」では、教育相談における考え方の基本や、クラス・学校での居場所作りについて学んだ。様々な事例紹介があったなかで、本校の生徒は「これまで頑張ってきて優秀と言われてきたからこそ、高校入学後につまずく」という事例に当てはまる人が多いと感じた。そのほかにも生徒それぞれに悩みや困りごとがあるが、「行動と人間性の両面から考えること」「問題を外在化させて考えさせること」など、問題と向き合うときの視点について新たに学ぶことがあった。悩んでいる生徒や学校に足が向かない生徒がクラスにいた時、その場ではできる限りのことをしたつもりでも、研修を受けると改めてもう少しできたことがあったのではないかと考えさせられる。だからこそ、自分ひとりの経験や考えにこだわるのではなく、積極的に周りの先生と協力していきたい。

「学校組織の一員として」では、学校に対するニーズおよび活用できる資源を整理して学校目標を設定し、その達成に向かう必要性を学んだ。教職5年目を迎えた今、自分の授業やクラスのことだけで満足してはいけないことを強く感じた。日々の業務を見直してもう少し余裕をもって自分の仕事を行うとともに、学年・学校運営にも積極的に関わりたいと思った。講義の

なかで、学校目標に基づいて自校のプレゼンテーションを行うという演習があった。本校の強みについてまとめるなかで、実は十分に理解していなかった取り組みや、目標に書いているものの私自身はそれを達成するための取り組みを十分に行っていないことに気づき反省した。また、他校のプレゼンテーションを聞くことでそれぞれの学校の特色を知ることができた。そのような良さを、高校を選択する中学生やその保護者、また、高校生の活動を見守る地域の方々にどのように伝えていくかが大切だと思った。

「生徒の実態を踏まえた授業改善」では、事前に提出した授業レポート（次頁に掲載）をもとに、国語科・社会科の先生と協議を行った。3年間同じ学年に携わり、入学から大学入試まで指導したことで感じた課題や、教育課程変更に伴い生じた悩みについて他の先生方からアドバイスをいただいた。学習指導要領に基づき目標や身に付けさせたい力を明確にして、ひとつの教材のなかで扱う内容を絞ることが私自身の課題だと感じる。また、思考力が重要視されているとはいえ、本校の生徒が大学入試を目標にしている以上は知識の定着をおろそかにするわけにはいかない。一方、講義形式・暗記重視の授業では意欲がそがれてしまう。知識を身に付けることが読む楽しさにつながることを実感させられるような授業作りが必要だと感じた。

（2）Ⅱ期について

「発達障害のある生徒の理解と支援」では、発達障害のある生徒の対応について改めて確認した。事例を聞きながら、「発達障害」とまではいえないが日常生活で困りごとを抱える生徒、あるいは、本人には自覚がないが少々周囲とギャップがある生徒への対応は難しいと感じた。また、授業や教室環境のユニバーサルデザインについての考え方が印象的だった。授業の指示の出し方、板書など意識していたものの、まだまだ改善の余地がある。新校舎の教室環境をまだ整理しきれていないのですぐに片付けようと思った。

「生徒の実態を踏まえた授業改善」ではⅠ期と同様、国語科・社会科合同でⅠ期の課題に対する実践報告と協議を行った。他の先生方の挑戦的な取り組みや、指導主事の物部先生の「授業のことで迷うことは良いこと。思考停止するほうが危ない」という言葉から、失敗しても色々な授業方法を試してみようと思った。教科を問わず授業参観に行き、生徒の思考を動かす方法を学んでいきたい。また、自分ひとりで考えるよりも他の先生の実践を聞いたり協議を通して考えたりする方が何倍も刺激になり、授業でグループワークを希望する生徒が多いことがよくわかった。

4. 研修全体を通して

卒業生を見送ったせいか良くない余裕が出てしまっていると感じていたが、今回の研修を通して気を引き締めることができた。講師の先生方が口をそろえて採用5年目前後の行動がその後の教員生活を作っているとおっしゃっていた。ここまでの経験や研修をもとにしつつ、若いからこそできる挑戦をしていくことで自分の強みを確立していきたい。

また、自分自身のことで精一杯だったが、5年目となると学校組織を動かす一員としても期待されることを、講義を通して改めて感じた。目の前の仕事はもちろん、半年後、1年後、5年後の横手高校がより良いものになるための行動や提案ができるようになりたい。

〔資料〕

A－12 教職5年目研修講座（高等学校）Ⅰ 実践レポート

「自校の生徒の実態を踏まえた授業展開の工夫と、実践上の課題」

1、自校の生徒の実態

（1）勤務校について

勤務校はほぼ全員が四年制大学への進学を希望しており、学習への意欲が高い。また、SSH指定校であり、「エビデンスを基に議論を積み重ね、国際社会で活躍するグローバルサイエンスリーダーの育成」という題目のもと、様々な取組を行っている。研究内容、手法は理数科目の色が強いが、研究過程で必要になる「論理的思考力や課題を発見する力」、「他者との協働」、「自らの取組を国内外に積極的に発信し、交流を持つこと」等については、国語科が中心的役割を果たすと考ええる。

（2）生徒（今年度1年生）の国語への意欲、関心について

4月に実施した「スタディサポート」（ベネッセ）のアンケートにおいて、「国語が苦手」と解答したのは18.3%と、それほど多くはない。授業をしても、国語に対して意欲的に意見を述べようとする生徒、苦手ながらも意見を交わすことで考えをまとめようとする生徒がほとんどであることから、得意または意欲的という印象が強い。

また、授業開きの際に「国語の授業」について自由に記述させたところ、「小説の授業や読書が好き」「古文が好き」「苦手だが好き」という解答が目立った。一方、「答えが一つではないので苦手」「記述問題が苦手」という解答も各クラスで数人ずついる。なお、今年度に限らず授業アンケートなどでは論理的文章よりも文学的文章について好意的な言及をする生徒が多い。

（3）「問いを発する」ということについて

上述のアンケート結果によれば、今年度入学した生徒のうち、「疑問点は質問をして解決する」という質問に対して「あてはまらない」と回答した生徒が10.6%と、数学3.0%、英語3.8%に比べてやや高い。原因は様々あると思うが、疑問点の解決の仕方がわからない（文章で述べられていることは筆者、作者でなくてはわからないと考えてしまう）という生徒が多数いるのではないか。

2、授業展開の工夫

生徒の実態から、本校の課題は（1）論理的文章の読解力の向上、（2）課題発見能力の育成、（3）疑問点の解決スキルの習得、の3点であると考ええる。そこで今回、この3点について具体的な授業実践とともに述べる。

（1）論理的文章の読解力の育成

…複数テキストを用いることで理解を深められるのではないか。

今年度1年生「現代の国語」のうち「読み」の授業で「ことばとは何か」（内田樹）を読んだ。ソシュールの言語論について述べた評論であるが、「「名前を持たないもの」は実在しない」という記述の理解に悩む生徒が初読段階で半数ほどいた。

そのため、「ことばとは何か」を一通り読んだあとに「ものことば」（鈴木孝夫）を関連資料として読ませ、共通点、相違点についてグループごとに話し合った。「ものことば」も「ことばとは何か」同様、名付けられることで存在を認識できるという内容の文章である。両者を読むことで、「ことばとは何か」で出た疑問が解決できたという生徒が多くいた。

（２）課題発見能力の育成

…様々な「問い」に触れることで、初めて読む文章に対しても「問い」を立てられるようになるのではないかな。

そもそも、文章の何が「問い」になり得るのか知ることが必要である。中学校までも十分に国語の授業で扱った面であり、多くの生徒が初読段階でいくつかの「問い」を立てることができている（特に文学的文章ではその傾向が強い）。その「問い」を共有することで、何気なく読んでいた部分からも「問い」を立てられると気づくことができるのではないかな。さらに、その「問い」を授業で取り上げることで生徒がより意欲的に授業に参加することができると考える。

また、論理的文章の「タイトルの意味」「段落構成の工夫」、文学的文章の「語り手の人称」「作者と作品内容との関係性」などは読む文章が異なっている程度共通してもつことができる課題意識である。それらを体系的に扱うことで、文章を読むときの着眼点が身に付くと考える。

（３）疑問点の解決スキルの習得

…問いを見つけ、対話を重ねることで考えを深められるのではないかな。

昨年度、３年生「現代文Ｂ」の授業で「舞姫」（森鷗外）を読んだ後、登場人物の行動に疑問、反感をもったという感想が多く出た。それをもとに「『舞姫』で一番の「わるもの」は？」という課題を設定し、議論を重ねた。

教科書や便覧、インターネットの情報から考えた個人の意見を３～４人のグループで共有したあと、代表意見を１つ板書し、グループ同士で質疑応答を行う。板書する意見については、グループ内で共感を集めた意見、あるいは他のグループには無さそうな意見を出すよう指示した。後者の指示の狙いは、グループ内で互いに気を遣って多数派の意見に収束するというのを防ぎ、クラス全体で多角的に考えられるようにすることである。また、グループ同士の質疑応答では、各グループで必ずひとつは質問あるいは反論を提示するよう指示した。狙いは、議論を通して根拠の明確さ、妥当性を検討し、より論理的に考えることを促すためである。

その後、再度個人で同じ問いについて考察をまとめる。グループやクラスでの議論を通して異なる「わるもの」に気づいた人、考えは変わらないが根拠が明確になった人など、はじめより考えが深まった意見がほとんどだった。また、授業後のアンケートでも議論を通して新たな視点を獲得できたという振り返りが複数あった。

3、実践上の課題

(1) 論理的文章の読解力の向上

論理的文章を用いた読みの授業は、筆者の主張を吟味することに重点をおくため、問いを生み、それを検証するという流れが作りづらいと感じる。

例えば、2(1)で述べた授業の最後に、初読段階で数人から出た、「『名前を持たないもの』は実在しない」というならば、例えばまだ名前を持たない新種の生物はどうなるのか」という問いについて考えた。両テキストの文章で述べられた「ことば」と「もの」の関係性から推論することを狙って設定した課題だが、本文を根拠にすることが難しく、また、授業者自身も推論の結果が適切か判断しきれず、「解決した」という実感がもてないまま授業を終えてしまった。

(2) 課題発見能力の育成

せっかく生徒に出してもらった「問い」を時数や内容などを理由に取り上げずに授業を終えることも多い。生徒の「問い」に触れないことが続くと「疑問を出しても意味がない、無視されてしまう」という思いを抱かせ、「問い」を立てることやそれを解決すること消極的になりかねない。また、科学的な評論を読んで生徒から出た「問い」が、内容読解の域を超えて専門的な知識を要する場合もあるが、あくまで「国語」の授業として、論理や表現を軸に授業を作る必要がある。

(3) 疑問点の解決スキルの習得

文学的文章においては、ディスカッションが盛り上がるあまりに恣意的な読みにならないよう、適宜テキストに立ち戻って考えさせる必要がある。また、論理的文章においては、(1)で述べたように、対話を通して内容に関する疑問点を解決する難しさを感じる。しかし、新教育課程では「現代の国語」や「論理国語」において論理的文章を扱う場面が増える。さらに、文章を読み生まれた「問い」に対し、「話す」「書く」の分野でどのような対話の場面を設定して解決するか、効果的な授業の在り方について考える必要がある。

A-12 教職5年目研修講座（高等学校）Ⅱ 実践レポート

「自校の生徒の実態を踏まえた授業展開の工夫と、実践上の課題」

（1）Ⅰ期をふまえた課題

1. 「説明的文章」で「問い」をもつ

教科書に載っている文章は全て素晴らしいものであり、疑問をもつ余地はないという思い込みを無くしたいと考えた。

2. 教師の側でも「問い」を設定する

今まで毎回初読段階での疑問を生徒に書かせていたが、それを授業に活かすことができなかった。また、初読段階では疑問が出てこない生徒も少なくない。そこで今回は、はじめは教師側で課題を設定し、読解する中で生徒の疑問、課題意識を取り上げたいと考えた。

また、Ⅰ期後に行った授業アンケートで「もっと生徒主体の授業にしてほしい」「他の人と話すことで視野が広がった」という意見が各クラスから出た。そのため、評論文を生徒が解説し合うという形式にした。

（2）授業実践報告

1. 学習課題

評論の構造に注目し、筆者の論理性について検討する。

2. 使用教材・設定理由

「わかっていること・わからないこと」（堀正岳）

取り上げた文章は、評論読解の核となる「問題提起」「主張」「根拠」が明確であり読み取りやすい。また、グラフや図が用いられているため、複数の資料を統合して読む力が求められる。一方、前半で「根拠」として挙げたデータ（「気候モデル」）が、後半で「わかっていること」として指摘されており、やや疑問が残る文章である。そこで、文章の論理性を検討するために適した教材だと考えた。

3. 授業内容と生徒の様子（全3時間）

〈1時間目〉

①本文全体を読み、地球温暖化がテーマであること、グラフや図が用いられていることを読み取った。

……グラフについて、何の数値を用いているかわからないという生徒がいた。

②冒頭の形式段落1・2から、「問題提起」→「主張（わかっていること・わからないこと）」の構造を読み取った。

〈2時間目〉

①グループごとに担当段落について「問題提起」とそれに対する「主張（わかっていること・わからないこと）」、「根拠」を整理した。

②他の段落を担当した生徒に説明し、全体の構造を読み取った。

……質問されたことで議論が発展している班もあった。

〈3 時間目〉 問い：筆者の文章は論理的か。

①他の段落の説明をふまえ、再度自分が担当した段落の「主張」「根拠」は妥当か考えた。

……生徒から、意味段落 1 で根拠とされていたデータが、意味段落 3 で「まだわかっていないことが多い」データであると述べられており、矛盾しているのではないかという意見が出た。

②意味段落 4 についても「問題提起」「主張」「根拠」を整理した。

……意味段落 1 ～ 3 の「主張」（地球温暖化について「わかっていること」と「わかっていないこと」がある）は、意味段落 4 の「主張」（社会は「わかっていること」と「わかっていないこと」の整理を行う必要がある）の「根拠」であるという評論の階層的な構造について指摘する生徒がいた。

④ 文章を批評する視点を示したワークシート（次頁）を用いて批評文を 2 文でまとめた。

……想定している読み手について、「すべての人」「地球温暖化の研究をしている人」に二分されたがどちらにせよ、「優れている」と評価する生徒が多かった。理由としてデータを豊富に用いており根拠がしっかりとしていることを挙げていた。一方、少数だが「優れていない」「わかりづらい」と評価する生徒もいた。理由として先に述べたように根拠に矛盾があることや、専門用語が多いこと、誰を対象とした文章か不明瞭なことを挙げていた。

4. 評価

提出されたワークシートの表の「自分の考え」と「根拠」が対応しているか否かを評価の観点とした。ほとんどの生徒が本文を根拠に挙げて考えをまとめており、生徒間の差がつけづらいと感じた。

（3）全体を通しての成果と課題

1. 成果

今回示した批評の視点は他の評論を読むときにも活かすことができる。実際に、今回の評論を読んだ後に、新聞の社説でも「問題提起」「主張」「根拠」を読み取り、論理性について批評する活動を実施した。そこでもデータがあることから「論理的」と判断する生徒が多い一方、そもそも問題として提起されている内容が妥当か疑問をもつ生徒が数人いた。

2. 課題

誘導的になってしまわないようにする。特に批判的意見をもつ生徒について注目してしまうが、文章を論理的であると評価する生徒も同等にしっかりと読解を行っていることを評価しなくてはならないと感じた。

また、説明文での「問い」の難しさは依然として感じる。今回の論理に着目した批評の視点は読む場面や文章を問わず大切だと思うが、毎授業で行うと飽きてしまう。また、内容についての問いも取り入れたい。教師側がどのような発問を設定するか悩みどころである。

わかっている「と」いない「と」(堀正岳) まとめ

組 番 ()

★記述をもとに、筆者の意図を推論し、文章を評価する。

(1) 筆者の意図を推論し、文章を評価するために整理！

着眼点	自分の考え	根拠(教科書のどの部分?)
A 誰を対象に書いた?		
B 何を伝えるために書いた?		
C なぜそれを伝える必要があった?		
D 伝えるためにどんな工夫をしている?		
E 筆者の主張は論理的か?		
F 【その他 着眼点】		

(2) まとめ

この文章は【①
なぜならば、【③

【を読者対象とした文章として【②

】。

【からだ。

1. 日 時 令和4年7月1日（金）10：00～16：15

2. 場 所 秋田県総合教育センター

3. 概 要

（1）講義・協議：これからの保健体育科の授業づくり

秋田県総合教育センター 指導主事 島本 知克

～目標～

- ・それぞれの資質・能力の習得において、求められていることを理解する。
- ・生徒の実態を踏まえた上で、保健体育授業の方向性を理解する。

①育成を目指す三つの柱について

「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの資質・能力を、「主体的・対話的で深い学び」を通して培う。

- ・主体的な学び：学ぶことに興味や関心を持ち、（中略）見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び。
- ・対話的な学び：子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方と手がかりに考えること等を通じ、自己の思考を広げ深めていく学び。
- ・深い学び：各教科の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、（中略）思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。知識と知識をつなぎ合わせることで、解決したり新しいことに気が付いたりすること。

【深く学ぶことができた状態・姿】

- ・（既存の）知識同士がつながった。
- ・既存の知識と新しい知識がつながった。
- ・持っている知識を使って、問題を解決できた。
- ・持っている知識が、実生活において役に立った。

②全国、秋田県の生徒の現状について

秋田県の子どもたちの実態

- ・運動習慣の二極化傾向
- ・体力の全体的な低下傾向（特に走力と投力）

③単元の指導と評価の計画について

- ・できるだけ多様な評価を行い、多くの情報を得ることが重要である。
- ・ペーパーテストは、評価方法の1つとして有効であるが、ペーパーテストにおいて得られる結果が、目標に準拠した評価における学習状況の全てを表すものではない。

- ・1時間に多数の観点を評価しない。
- ・指導機会と評価機会を明確にする。
- ・観察評価は学習期間を保証する。

④ 本校における「保健体育科授業」の課題や悩みについて（情報交換）

本校の課題・悩みとして、次の3つを提示した。

- ・ICT機器の有効な活用場面について
- ・運動制限のある生徒の授業への関わりと評価について
- ・評価規準の設定と適切な評価場面について

また、同じグループの他校の先生方からも、ICTの活用や評価に関するものに加えて、「運動能力が極端に低い生徒の指導」や「生徒数の少なさから球技の練習やゲームが成立しない」といった課題が出され、それらの解決策について話し合いをした。

（2）実技・演習：これからの保健体育科の授業づくり

秋田県総合教育センター 指導主事 島本 知克

～目標～

- ・「指導と評価の一体化」の趣旨を、演習を通して理解する。
- ・求められている授業改善の方向性について、演習を通して理解する。

① 知識や技能を“活用・発揮”させる授業の構想

【演習テーマ】4種目の球技から1つを選択し、生徒が既習の知識や身につけた技能を活用・発揮させて、学習課題を解決する授業を考える。

第3グループ（能代・五城目・大曲農・角館・横手）は、既習の知識（バレーボールのオーバーハンドパスをする際の体の使い方）を活用・発揮させて、バスケットボールのシュート感覚をつかむための学習活動を構想し、模擬授業を行った。

② まとめ、振り返り

- ・「アクティブラーニング」とは、何か特別なことをやるということではない。
- ・「100%ワンウェイの授業」以外は全てアクティブラーニング型授業である。
- ・より多くの生徒たちに、より多くのアクティブラーニングが起きる時間を増やすこと。

4. 感想

運動種目や球技の型が違っていても、既習内容の中に生徒が学習課題を解決する上でヒントとなることは多く、我々はそれに気づかせる役割として、見識を高めておく必要があると感じた。また、他校の先生方との協議を通して、評価の観点や評価機会・方法等についての情報交換をすることができ、大変有意義な研修となった。

令和4年度 特別支援教育研修会

「特別支援が求められる生徒への支援について」

令和4年6月21日（火）実施

研修部 齊藤 千秋

発達障害の診断を受け、小・中学校時代に支援を受けてきた生徒や、その疑いがあり、対人関係や課題提出等に困難を抱えている生徒が全県的に増加傾向にある。本校でも、学校生活の様々な場面で職員が対応に苦慮することがあり、課題となっている。生徒が落ち着いた学校生活を送るための支援体制づくりを目指して行われた本研修では、精神保健福祉士・公認心理師である 佐藤 秀一 氏（秋田明德館高校スクールソーシャルワーカー（SSW））に、発達障害に関する最近のデータや県内における実際の事例を紹介していただき、生徒対応のヒントを得ることができた。

1. SSWへの相談依頼の状況

令和3年度は、発達障害である自閉症スペクトラム障害（ASD）の他、社会不安性障害、HSP（ハイリーセンシティブパーソン）など様々な障害の事例が多かった。相談依頼の主な背景には、発達障害や人間関係、保護者との関係、家庭環境の問題などが多い。

平成29年度から令和3年度までの事例対応の累計は、事例件数208件中、相談支援が約半数を占め、次いで医療機関受診の提案および医療機関との連携が約3割を占めた。他にも対応内容として、制度利用の提案（自立支援、生活保護、社会福祉協議会の小口融資、フードバンク、シェルター、フリースクール）、児童相談所の活用、生活習慣表の作成、福祉事務所や民間企業、農家との連携、障害者手帳申請の提案、メンタルハート八郎潟やNPO法人つなぎ隊の紹介などが挙げられる。その中でも、児童相談所および福祉事務所の活用は欠かせない支援方法となっている。また、支援方法が多様化し、相談支援と社会資源を活用した生活支援を複数組み合わせた事例も見られ、ニーズに応じたきめ細かい支援が求められている。

2. 事例研究

様々な事例を紹介していただき、いくつかの事例において、支援する上でどのような姿勢が求められるかを考えた。

3. 今後注意すべき対応のポイント

- ① 「アサーション」：爽やかな人間関係を構築できるかどうか。
- ② 生徒や保護者に率直に考えを伝えることができるかどうか。
- ③ 生徒に共感力の大切さを伝えることができるかどうか。

4. 最後に

何より大事なことは、相談技術より、相談支援する人の健康維持、気分や感情の安定である。

校内研修会（ICT講習会）

研修部 成田陽香 高橋幸央

実施の背景

生徒用の Chromebook が導入されて4年が経過した。新型コロナウイルスの影響も相まって現3年生は入学当初から Chromebook や Google Classroom の利用を続けてきた。1、2年生は入学時から1人1台 Chromebook が配付されており、3年生と同様に使い慣れている。また、全県的にも導入が進み、各教科の研究発表などを通して活用事例を紹介する場も多い。

一方、活用方法や頻度については教員・教科間で差がある。また、新型コロナウイルスの影響による臨時の学級閉鎖や家族感染による自宅待機が続くなかで ICT の効果的な活用はますます必要とされている。さらに、今年度は新たに Google Chat を導入したり、新校舎への移転があったりするなど、昨年度から変化した部分もある。

そこで今年度は、昨年度の ICT 講習会の内容に加えて、Google Chat の活用や新校舎でのプロジェクトの活用などをテーマにして研修会を実施した。

（参考）昨年度の ICT 講習会のテーマは以下の通りである。

- 第1回「Gmail を使おう」
- 第2回「Google Drive を活用する」
- 第3回「Google Forms でアンケート」
- 第4回「授業での活用①（Padlet、Google Jamboard、Whiteboard.chat、他）」
- 第5回「授業での活用②（Google Slides）」
- 第6回「授業での ICT 活用事例紹介」

目 的 日常業務の効率化を図るとともに、より効果的な生徒の学びのために
Google Workspace for Education の活用方法について学ぶ

対 象 全教員

日時と内容

第1回 4月1日（金）

「セキュリティとチャット」 講師 鈴木亘

目的 チャットやメールの使用方法及びセキュリティの確認をする

- 内容
- ・二段階認証の推奨
 - ・Gmail の機能
 - ・Google Chat の活用方法

連絡はSpaces（チャットルーム）を活用しましょう。

職員間、あるいは生徒への連絡についてはスペースを活用しましょう。特に生徒へのSpacesの活用は始まったばかりですので、新鮮な情報が載ることで生徒の認知度も上がり、毎日確認をする習慣がつくことで連絡が行き届きやすくなります。積極的に活用しましょう。

昨年までClassroomで行っていた連絡の一部もSpacesに移行します。今後は**Classroomとの使い分け**についてが課題となります。Classroomは授業に関連した内容を中心に活用したらいいいのではないのでしょうか。



第2回 11月11日（金）

「プロジェクトの使い方とファイルの共有」 講師 鈴木亘

目的 新校舎のプロジェクトの使い方と
ファイルの共有方法を確認する。

内容 ・プロジェクトとの接続
(有線・無線)
・ファイルの共有



第3回 12月13日（火）

「Google Forms で小テストを作成する」 講師 鈴木亘

目的 Google Forms を活用して、
テスト採点等の業務の効率化を
図る。

内容 ・テスト機能を用いてできること
・集計、採点の設定



成果と課題

今年度の研修を経て、授業内での ICT 活用だけでなく授業外での活用も変化した。

Google Chat の運用から1年が経ち、使い方にも慣れてきた。時間割変更が毎朝 Chat から確認することで、部活動の公欠やコロナ関連で出席停止になったときにも翌日の時間割を確認することができる。リアクション機能があることで、部活動の大会報告を中心に学年の垣根を越えたコミュニケーションが生まれている。

また、Google を通したファイルの共有機能を活用することで、教員の業務の負担軽減につながった。分掌部会の設定が難しいときは Chat にファイルを掲載することで意見の共有が可能になった。さらに、テスト機能を用いることで、小テストなどを採点する手間なくその場ですぐにフィードバックできるようになったことも業務の効率化につながっている。

今年度の研修は昨年度よりも回数が減ったが、放課後の会議や部活動指導を考えると研修会の設定が困難であるのが現状である。全員集まる形での研修以外にも、相互授業参観の感想や教務部が行っている授業アンケートと連携することで事例を共有する場を作っていきたい。

また、保護者アンケートでも ICT の活用について言及するものが少なくない。リモート授業を評価する声がある一方、Chat、Classroom を通した連絡については、「スマホを触る口実になってしまう」「自宅でプリントアウトする必要がある」「連絡する時間や方法を考慮してほしい」等の声がある。引き続き、より効果的な使い方やそのためのルールについて考えていく必要がある。

